

流域の人々と歩む月刊誌

くまがわ春秋

2020
7+8

第52・53合併号

災害新時代



楼門や社殿群も浸水した人吉市の青井阿蘇神社（7月4日、午前8時ごろ）© 宮原信晃

火の国、水の国、
焼酎の国。

球磨焼酎

織月



（前）月内三ツタマシ
宇梶剛士



世界的な品評会で
金賞を受賞いたしました。

Los Angeles
Wine & Spirits
Competition 2019



飲酒は20歳未満までから、飲酒運転は法律で禁止されています。妊娠中や授乳期の飲酒は、胎児・乳児の発育に悪影響を及ぼすおそれがあります。



織月酒造株式会社

<http://www.sengetsu.co.jp/>
〒868-0052 熊本県人吉市新町1番地

このたびの豪雨災害につきまして、皆様方にはご心配とご迷惑をおかけしておりまして誠に申し訳ございません。まだ一部商品につきましては、お客様にお待ち頂きご迷惑をおかけしておりますが、一日も早くお届けできるよう従業員一同頑張っております。

雑誌 81779-08-0



4910817790802
01000

月刊 くまがわ春秋 第52+53号 2020年8月20日発行

企画：人吉球磨総合研究会 発行：人吉中央出版社 TEL 0966-23-3759 / FAX 0966-23-3759
〒868-0015 熊本県人吉市下城本町1436-4の3号 <http://www.hitooyoshi.co.jp/> info@hitooyoshi.co.jp

定価 1,100円 本体 1,000円

泥の中から生まれた一冊。緊急出版！

益田啓三

小説 肥後人吉藩残照

今年の元旦より書き始めたこの小説「肥後人吉藩残照」相良頼綱は、7月に上梓の予定でした。今回の水害により本の出版どころではないはずなのですが、ヘドロとの戦いに疲れ落ち込む自分の心にシゲキを与えたくて、このような状況の中にあえて出版することになりました。

(益田啓三)



「これで威張らなくて
よくなった…」
子爵を返上し
一庶民として
人吉に住んだ
最後のお殿さま
「相良頼綱」

人吉中央出版社

B6判 216頁 並製本 定価 1500円＋税
お問合せは人吉中央出版社、または益田啓三さん(0966-22-3070)まで。

7月・8月合併号(第52+53号) 目次

災害新時代

- 人が、家が、橋が… 令和2年7月豪雨…3
限界集落便り 坂本水害編① 坂本桃子…6
負けるな人吉 球磨・坂本!! 岐部明廣…10
坂本町に何が起こったか?① つる祥子…14
追悼・大門のおじちゃん 上村雄一…22
その後の球磨村のお堂…27
大雨と洪水 興野康也…28
- おつとわつとあすび④ 松舟博満…13
くまがわの神さん仏さん④ 宮原信晃…24
漢和字典は面白い③ 鶴上寛治展31
あがつ段④ 上杉芳野…32
一枚の古写真から④ 益田啓三…34
建築みてある記④ 森山 学…36
記憶の落ち穂(51) 坂本福治…41
人吉・相良文書を読む① 青木勝士…42
ひろしの「ぎひょう」…45
外来語から学ぶ英単語(52) 藤原 宏…45

- 「高木惣吉記念館」再開へ…46
「高木惣吉」と渋谷「高木」論 木崎康弘…47
茶もみ唄 上村雄一…52
牛のごとく 上田精一…56
「万年二等兵」について…60
万年二等兵① 尾方豊水…61
瀬戸致行という人 そして私① 東喜代雄…66
いもご短歌会…72
砂時計―思い出るままに① 小野武己…73
倉敷便り④ 原田正史…76
小説・相良清兵衛③ 山口啓二…78
字図で見る球磨の地名④ 上村重次…82
愚感随想④ 富永和信…84
鶴鶴短歌会 六月詠草…87
方言を味わう④ 七月 前田一洋…88
方言を味わう④ 八月 前田一洋…90
季語で一句⑧ 永田満徳選…92
季語で一句⑨ 永田満徳選…93
前号「くまがわ学習塾③の答え」…95

人が、家が、橋が...



楼門や社殿群も浸水した人吉市の青井阿蘇神社
(7月4日、午前8時ごろ)

7月4日午前 人吉市の状況

4時頃：球磨川が氾濫危険水位を超過
4時00分：人吉市が避難勧告を発令
4時50分：気象庁が大雨特別警報を発表
5時00分：人吉市が避難指示を発令
7時30分頃：球磨川の水が堤防を越える



人吉市の九日町通り

球磨川流域を直撃！

災害新時代へ——令和2年7月豪雨

7月3日から4日未明にかけて
湯前町で386.5ミリ、水俣市で
367.5ミリなど記録的雨量を観測
した今回の豪雨は未曾有の被害を
もたらした。

球磨川では6か所あるすべての観
測所で水位が過去最高となり、人
吉市では2か所で堤防が決壊した
ほか、球磨村や八代市など合わせ
て11か所で水が堤防を越えた。

人吉市中心部

人吉市を代表する観光名所の国
宝・青井阿蘇神社は4日の水害で蓮
池に架かる襖橋が壊れ、楼門や社殿
群も浸水するなどの被害を受けた。

7月9日、気象庁は「令和2年
7月豪雨」と命名、政府は7月10
日に「激甚災害」に指定した。

巻頭言

巻頭言に換えて

事務所の床の上に突然、濁流が押し寄せて来た。とっさに外で出してみると、あたり一面に茶色の水が溢れ、池のようになっていた。駐車場に置いていた車で避難しようとしたが、濁流が川のように押し寄せてくる光景に身の危険を感じた私は、事務所の建物の2階に駆け上がり、信じられない光景を眺めるしかなくなかった(写真)。



この人吉市下城本町にある事務所は、球磨川から直線距離で約700メートルの所にあり、ハザードマップによれば、浸水50センチ以下の場所となっていた。未明からの「避難勧告・避難指示」の防災放送を聞いていた私は、取りあえず床の上にある書籍や資料を棚の上に上げようと事務所に駆け付けたのだった。建物の2階から見ていると、水位はたちまち1メートルを超えて、身動きもできず、水が引くのを待った。やがて空には報道各社や国土交通省のヘリが現れ、人吉市上空を旋回している。携帯の情報を見ると、球磨川の水が氾濫したことを知るが、この時すでに、未曾有の災害が始まっていたとは知る由もなかった。

(編集部・松本学)

お詫びとお願い

本誌7月号の印刷・発送直前の水害に遭い、編集関係者が甚大な被害を受け、印刷会社の被災・郵便機能の停止などにより7月中の発行を断念せざるを得なくなりました。つきましては、今後もし不定期発行が予想されます。購読者の皆様にはご迷惑をお掛けいたしますが、合併号の発行をお許しくください。

被災された方々にお見舞いを申し上げます。なお、一時避難の方、あるいは転居された方からのご連絡をお待ちしております。

(人吉中央出版社)



水没した人吉市中心部。手前右が人吉駅、奥が胸川（共同通信社ヘリより）



4日の球磨村渡地区（市花保さん撮影）



氾濫した水が流木と一緒に集落を襲った球磨村渡地区

記録した2・1メートルの2倍以上に当たると4・3メートルに達したという。

球磨郡

球磨村渡地区では球磨川と支流が氾濫し、多くの家屋が被災。特別養護老人ホーム「千寿園」では入所者14人が

増水は、楼門・拝殿まで達し、社務所も浸水した。

熊本大くまもと水循環・減災研究教育センターの災害調査速報によると、下青井町近くでは、地面からの水の高さが1965年の水害で

犠牲となった。

山江村でも大規模な道路の決壊が起こり、多くの集落が孤立。

八代市坂本町

八代市坂本町では球磨川沿いを走る国道や県道の崩落、橋の流失などで孤



八代市坂本町藤本地区（読者撮影）



水没した坂本駅周辺（国土地理院の画像より）

立状態に陥り、自衛隊のヘリで救出される人が続出した（坂本町の被害の全貌は14頁参照）。

県内の被害

今回の豪雨による県内の死者は65人、行方不明者は2人。県が8月3日

災害新時代へ

今回の水害で被害を大きくしたのは、「今まで経験のない水の量と増えかただった」と多くの人が語っているとおり、過去の被害を参考に準備していたからではないか。気象庁が氾濫発生約5時間前に「100年に1度」レベルの水位上昇を予測していたが、その予測も活用されなかったという。コロナ対策も含め、これまでの常識を見直す時期にきているように思う。（春秋）

限界集落便り

2020年 坂本水害編 その①

坂本 桃子

大変ご無沙汰しています。「限界集落便り」の坂本桃子です。最後に寄稿してから随分と時が流れてしまいました。実は2018年に結婚し、現在は水俣市民となり、姓も「坂本」から「諸橋」へと変わりました。このようなタイミングでのお知らせとなったことをお許しください。しかしながら相も変わらず八代市坂本町（旧坂本村）へ通っており、より一層坂本の限界集落の営みを研究し続けております。こちらでは変わらず『坂本桃子』の名前を

大切につかわせていただきますのでご理解いただければと思います。前置きが長くなりましたが、今回はどうしても私も「くまがわ春秋」読者のみなさんへ坂本の今をお伝えせねばと思い、寄稿させていただきますこととなりました。しばらく「2020年坂本水害編」として連載をさせていただければと思います。坂本の情報をお伝えしていきます。

今日は2020年7月25日、あ

の日から3週間が経ちました。いまだに周りは混乱状態が続いており、だけでもちろん冷静な方もいます。笑うしかないね、と開きなおっている方もいれば、泣きたい思いだと話す方もいますし、状況はそれぞれです。自宅の被害の度合いや、今おかれている環境によっても異なると考えられます。ただひとつ、住民ほぼ全員に共通して言えるのは、将来に対する漠然とした不安があるということです。

今回は坂本町中心部の重要な施設や建物が、ほとんど全て壊滅的な被害を受けています。例えば坂本支所、コミュニティセンター（旧中央公民館）、消防署・駐在所・郵便

局・銀行・病院・商店と、あげればキリがありません。これらは町で暮らしていくためにとても大切なものばかりです。中心部から少し離れた場所にある2か所のガソリンスタンドも被災し、これも同じくとても

大きな問題であると考えられます。

元々、坂本の住民の生活圏は若い世代と高齢者で大きく異なり、若者はほとんど八代市の中心市街地の方へ働きに出ており、買い物やガソリンを入れるのも仕事帰りに済ませてから坂本の自宅へ戻ります。

一方で高齢者は（特に後期高齢者の話になりますが）言うまでもなく、坂本町内で全てを賄っており（高齢者と言っても元気の良い方はもちろん八代の街の方へ買い出しに行かれる方も少なくありませんが）、今回

の水害によって坂本で暮らしていくうえで重要な施設や商店の再開がなければ、かなり多くの住民が町外へ出ていくと予想されます。

みなさんも既にご存知かと思いますが、この「くまがわ春秋」の主幹である上村雄一氏も被災をし、上村氏がお住まいの荒瀬地区も目を疑うような被害を受けています。ちなみに荒瀬地区には住民の心の拠り所で、町外からの訪問者も多い、坂本の貴重な観光施設である「道の駅さかもと・坂本館」もあり、こちらも甚大な被害があったため毎日、駅長は休みなしで片付け作業をされています。そんな坂本の大切な地区のひとつである荒瀬地区で被災をした避難所にいらっしゃる上村さん



実家の母から送られてきた坂本町百済来地区の写真。球磨川の支流があふれ、集落が孤立。しばらくして安全な家に避難した(7月4日)

に、直接お話を伺いました（※ここからの情報は7月22日に伺った内容であり、本誌が発行されている時期にはまた状況が大きく変わっている可能性があることをご理解いただければと思います）。上村さんによると、災害直後の大混乱期では住民の不安は（ここでの住民とは主に高齢者）病院が変わることによる薬の心配などがまず第一にあり、そして高齢者は若者のようにSNSを利用しておらず情報がないため、被害状況を把握することもできていなかったようです。それが災害から1週間、2週間と経ち、だんだん今起こったことの深刻さが分かってきて、今は避難所の周りの住民の「不安」は将来への漠然とした不安へと変わってきているとのことでした。

その漠然とした不安とはやはり、病院や商店はどうなるのか、また坂本で暮らすことができるのか、といったものが主に挙げられるようです。現実が分かってきて、精神的な不安を抱えている住民も増えてきたと聞きました。それは私にとつては想定内であり、一刻も早く高齢者のみなさんをはじめとする愛する坂本町民のみなさんのお話を聞いてあげて、寄り添ってあげたいと思うのですが、このコロナ騒動による対策の厳しさで避難所の中へ入ることがなかなかできません。人は、不安を口に出し、話をするだけでも心や頭の整理ができたりするものです。通常であればこのような災害後の避難所の心のケアも、全国から専門の人たちが駆けつけて対応してくださる

のですが、今回はコロナのせいもあり、そちらの対応も遅れている、というより機能していないと言った方がいいかもしれません。避難所の対応がとても気になるところでありますが、一方で被災した坂本の現場も大変なことになっています。

一部の方は坂本の被害も、新聞やネットで写真等ご覧になられたかと思いますが、あれはごく一部であり、想像をはるかに上回る町の広範囲に被害が及んでいます。まるで津波が来た後のような姿になっており、あらゆる復旧作業にかなり時間を要すと考えられます。次号では少しでも綺麗になった姿の坂本の写真をお見せできればと思うのですが、現時点では復旧のために本当にどれ程の時間がかかるのか見当もつきま

せん。現場では社会福祉協議会の災害ボランティアをはじめ、自主的に民間ボランティアのみなさんも動

き、家屋や集落の片付け作業に励まれている毎日です。町内ではさまざまな団体が積極的に活動されて

おり本当に頭がさがります。

『限界集落だより』というタイトルでこれまで坂本の集落の祭りや習わしについて主にお伝えしてきましたが今、坂本ではまさに限界をむかえようとしている集落があるのかもしれない。いや、ただ坂本の住民のど根性精神と、どんな逆境時でもいつも前向きな姿を私は知っていますので、信じて見守りつつけたいと思います。初めての子育てで私も毎日を過ごすのが精いっぱい、現場にも行けず何もお手伝いができず、もどかしい気持ちで胸が苦しいですが、遠くからたくさんさんの愛を送りつつけます。

（つづ）

【やかもと・ももこ／水俣市】



7月4日の百済来地区の写真

負けるな人吉!! 負けるな球磨・坂本!!

人吉市医師会長 岐部明廣

コロナ、そして今回の未曾有の大洪水。

ダブルパンチ。

神様は、いるのだろうか？

神様は、何をしているのだろうか？

か？

仏様は、いるのだろうか？

観音様は、いったいいるのだろうか？

か？

ついつい、疑ってしまう。

写真のように山田川はどこか分らないように増水し、私の病院（外

山胃腸病院）も床上160cm浸水した。

一階のCT、レントゲン、エコー、

心電計、血液検査機器、内視鏡、

骨塩量測定器、電子カルテ等が全

滅した。

（写真） 何処が山田川か分かりま

すか？

これが現実か？

人吉旅館の姿を見て、涙が止まらなかった。

これが現実か？
信じられない。

神様はいるのだろうか？

神様は、どうしてこんな試練を

我々に与えるのだろうか？

「ヨブの叫び」のようだ。

しかしまだ命がある。

何とか なるだろう。

人吉再生の夢は捨ててたまるか。

負けるな！ 人吉！

負けるな！ 球磨！

負けるな！ 坂本！

地球温暖化による7/3～7/

4の線状降水帯の降水量は尋常ではなかった。それをまざまざと実感した。

その線状降水帯は、すつぱり、まっぼし球磨盆地の上を9時間もかかって通過した。

神様はなんと意地悪なのだろうか？

その結果、球磨盆地全域の9時

間雨量は

平均350ミリ／9時間の過去

最高雨量になった。まさに未曾有の史上最大の集中豪雨。

350ミリ／9時間が仮に24時

間で降っていれば、あるいは線状降

水帯が少しでも南北にずれていれ

ば、今回のような大洪水は起こらなかった。

神様のなんと意地悪なのだろうか？

国土交通省の試算では、12時間雨量が262ミリの場合、球磨川の人吉地点の最大ピーク流量Mは7000トン（立法メートル）／秒だ。

しかしながら、今回の7/4の球磨川の人吉地点の最大ピーク流量Mは7000×（350ミリ／262ミリ）×（12時間／9時間）＝12468トン／秒にもなった。

信じられない最大ピーク流量だ。人吉市の堤防を簡単に越えるはずだ。

国の専門家も認めておられるよう



外山胃腸病院（7月4日、人吉市南泉田町）

おっとわっとあすび その④

絵と文／松舟博満

に、これまでの治水計画を根本から考え直さなければならぬ最大ピーク流量になった。

信じられない最大ピーク流量。

地球温暖化のツケらしい。

あゆの里の前の球磨川の河道は、私の試算では、最大でも6000トン／秒しか流せないの（国土交通省は4000トン／秒しか流せないという）、6000トン／秒以上（国土交通省は8000トン／秒以上）の水は堤防からあふれる計算になる。

仮に川辺川ダムがあつたとしても川辺川ダムは最高でも2400トン／秒しかカットできない。

最大カットしても、まだ人吉地点の球磨川は10000トン／秒以上の流量だ。

嘩あ、川辺川ダムは全く無力なのか！

7／4川辺川上流雨量、翌日7／5の川辺川上流の雨量から試算すると、川辺川ダムがあつたとしても、ダムは満杯になり、ダムを守るために7／5はダム緊急放流を余儀なくされるだろう。ダム緊急放流による第二氾濫を免れない事態になったと試算される。

嘩あ、川辺川ダムは第二洪水の元凶になるのか！

怖い。驚くべき真実。

更に渡より下流域の豪雨や八代海の大潮も今回の人吉市の氾濫を助長させた。

神様はなんと意地悪なんだろう。

負けるな！ 人吉市民！

負けるな！ 球磨村民！

負けるな！ 坂本町民！
私も負けない。
何年かかつて

故郷再生の夢を捨てないぞ。

ピンチこそ最大のチャンスと捉え、非常時こそ不可能が可能になる。

（大胆に所有地交換さえして、これを契機に新しい人吉市街地再生プランを検討したらどうだろう。

例えば、KUMABA↓青井神社↓人吉城趾（↓球磨川下り発舟場）までの新しい遊歩道を作ったらどうだろう。

緑豊かな遊歩道を作り、市街地の中央に緑豊かな憩い大広場を作ったらどうだろう。

【きべ・あきひろ／人吉市】

ドングリの木と

ショウヤ

夏休み昆虫採集時、必ずんぐてえ見てきるきおった木のあつた。

カミキツムシの側たんば囓んしゃで木に傷んついたら、それから汁ん出おったでそけにやショウヤ（クワガタムシ）・カブトムシ・ハチ・アブ・アブラ



ムシ（カナブン）チョウチョぐたつとん寄つて集つとつて、汁つばなみゅう（舐める）ともうて側たんばくじつもんで、傷のどんどん広がつて、汁んのいっだんと出つげえなんもんで、虫どのケンカしいい舐めぎや来おった。

おどまあドングリの木（クヌギ）ちいおった。木の飯碗ぐりやん太さんなれば、うち切つてナバ（キノコ）木んしおつやいた。三尺ぐりやんこだめらいたナバ木にやシイタケンコマば打ち込で、日の当らん所けえ立てとられば、シイタケン木の側

たんから出てきおった。

切り株からにやじきに芽の出で、太うして元氣ん良かとは残けえて他んとは全部うちきやでしまわいたで、二、三年もすれば太うなつて、ショウヤば採つぎや行きぎやなんめえなつおった。

カシの木ん良うほうどつて、黒か色しとつとは、全部「カシノキ」ちゅうて、ドングリの木んおつたつちやカシノキちゅうた。

ツノん先の双つなつてピンタに枕ばかるうたごつしとつとば「オタカラ」て云いおつたで、数の少なかつたでじやろうかしらん。

【まつふね・ひろみつ／青井阿蘇神社・文化苑「童遊館」】

7月4日球磨川水害 坂本町に何が起こったか？ ①

自然観察指導員熊本県連絡会会長 つる詳子



図① 坂本の浸水推定集落（国土地理院地図より）
赤…被害を受けた集落や橋・橋梁 緑…被害を免れた集落
黒▲は死者、及び行方不明者を出した場所

7月豪雨の深夜から降り始めた雨は、未明になって激しさを増し、流域に未曾有の水害を起こしました。特に下流の坂本町は、球磨村同様狭窄部が多いうえに、町の南端に瀬戸石ダムという障害物を抱えているために、急激な水位上昇が起こり、球磨川沿いの集落は軒並み家屋流出、家屋倒壊、橋・橋脚の流出が起き、鉄道も道路も崩壊、町に入る道さえ失くなるという大災害を起こしました。今回は、その全貌と瀬戸石ダム、鉄道、そ

して最も家屋流出が多かった合志野地区の被害について、写真で報告したいと思います。

坂本町の被害全貌

球磨川流域に線状降水帯が停滞した7月4日未明からの雨は各地で400ミを超える24時間降水量を記録し、坂本町は球磨川沿いの集落のうち、今泉や佐瀬野、また数件を除く葉木以外の殆どの集落が、甚大な被害に見舞



写真① JR坂本駅付近。坂本駅から50 m程上流の低くなった護岸から一気に水が道路や線路を伝って、集落を襲った



写真② 鎌瀬の球磨川第一橋梁の崩落後（上）と崩落前（下）



われ（図①）、死者4名、行方不明者1名の人的被害を出した。人吉市の床上浸水3千779棟、床下浸水906棟に対し、坂本町の住宅被害は、全壊142棟、半壊162棟、一部浸水70棟（非常災害対策本部8月7日現在）と、その被害の甚大さは、



写真⑥ 西鎌瀬集落。鎌瀬橋の下流左岸側にある集落



写真⑦ 国道219線や県道は至る所で崩落している



写真⑩ 被災した家屋の中。泥が堆積した天井が落ち、一階部分の家財道具もすべて泥まみれに

また、深水橋・坂本橋・鎌瀬橋・球磨川第一橋梁が流出し、道路は至るところで崩落・崩壊、肥薩線も原形をとどめるところは殆どない程に破壊された。

堆積した泥の中に、土台だけ残した家屋、原形を留めぬほど倒壊した家屋、天井が落ち泥の中に家財道具が散乱する家屋、流木や自動車が入り込んだ家屋、転がるミキサー車等々を目の当たりにして、水の力の前に町は消滅したと思えた程の光景であった。

町に入る道路は国道3号線二見から入るルート一か所しかなく、葉木橋付近を除いて、多くの集落につながる

道路は寸断、車を失った住民は、テレビ・電話など通信手段もなく、ただ、避難所にじっとしていることだけを強いられた日々が続いた。1カ月以上たった今も、水や電気がいまだに來ていない集落、ようやく泥出しが始まった家屋がある。(写真①～⑩)



写真⑨ 肥薩線（中谷橋下流）。道路より4～5m高いところにある線路より更に2m上まで水が来た形跡がある

今回の出水の破壊力が下流坂本町において、いかに凄まじかったかを物語っている。急激な水位上昇に町民は逃げることにせまなならず、浸水集落の殆どの人が自衛隊のヘリによって救助され、八代市内の避難所に移動させられた。



写真③ 崩落した鎌瀬橋。対岸は中津道集落



写真⑤ 崩壊した旧深水発電所（上）と、在り日の深水発電所（下）



写真④ 崩落後の深水橋（上）と崩落前の深水橋（下）



堤防が決壊した合志野集落

被災した多くの集落の中で、堤防が決壊した合志野集落の被害は、想像を絶するものである(図②)。合志野



図② 合志野集落。×は崩壊した家屋。△は半壊家屋。青線が堤防の決壊箇所

集落は撤去された荒瀬ダムから国道219号線を約2km下った左岸にある。荒瀬ダム下流で大きく右に湾曲している流れが緩やかに左に流れを変えようとする地点の堤防が、今回50mほど決壊した。水の勢いは、国道219号を川に



写真⑪ 国道219号線の北側からみた合志野集落。国道沿いの建物は軒並み崩壊



写真⑫ 堤防決壊箇所。50mにわたり決壊。一気に合志野集落を襲ったと思われる



写真⑬⑭ 倒壊した食事処「和嶋」(上)と、被災前の「和嶋」(下)



変え、そのまま道沿いの集落をなぎ倒しながら下ったのだろう。道路沿いの家屋の1階部分を浸水させ、水が

流れを阻害した瀬戸石ダム

引いた後の国道沿いは瓦礫と化し、赤い屋根の民宿「和嶋荘」だけがぽつんと立っていた。今回の水害に関して、流域のあちこちで「川津波」という言葉を聞いたが、合志野の道路沿いの家屋はまさに津波にあったように、持ち去られていた。

これだけのスピードがある出水の中、よく死者を出さなかったものだと思うが、取り残された人々をボートで救出した住民がいた。これについては、別の機会に報告したい。

7月4日未明、球磨川の水量はどんどん増え、瀬戸石ダムは放流量を増やし、ある時点でゲートは全開されたまま放置された。この時瀬戸石ダムはどのような状態であつたのだろうか。被災者の証言からもなかなか見えてこない。マスコミによる瀬戸石ダムに関する報道は一切ないまま、7月17日のデイリー新潮に「熊本豪雨で球磨川『瀬戸石ダム』が決壊危機」という見出しの記事が掲載されると、その真偽を巡って、ネット上にも様々な



写真⑮ 転倒した車



写真⑯ 残った建物の中は、泥に家具が埋もれている



写真⑰ 崩落した鎌瀬橋

意見が飛び交い、私にも多くの問い合わせがあつた。現場を見ないことには何のコメントも出せないもので、7月19日現場まで行ってみた。219号線は至るところで寸断し、記事から判断するに、瓦礫の山となった反対側の県道を歩くしかないようである。崩落し

た鎌瀬橋の近くに車を止め、そこから片道約4kmの道を往復した。

県道に至る所で崩落し、流木や岩や砂礫が山のようにつもり、電線の高さにまでゴミがひっかかり、折れた電柱も見かける。電線にゴミが引つかかっているところも多い。並行して走る肥薩線は道床のバラスがすっかり流され、レールは宙に浮き、大きく曲がり、壊れた擁壁は道路の上に散らばり、どこを歩いたらいいのかわからないところばかりであった。浮いたレールの枕木を歩いたり、



写真⑱ 市ノ俣川合流点付近



写真⑲ 瀬戸石駅跡

トンネルの中を歩いたり、瓦礫の山を越え、平坦な道の倍の時間をかけ、ダムまでたどり着いた。

上げられたゲートと管理橋の間には流木やゴミが引つ



写真⑳ 瀬戸石ダム

かかり、放流量を超えた水量が管理橋やゲートに阻害され、国道219号線と県道に逃げ道を探すように溢れたのは一目瞭然である。溢れた流木が国道側に大きなヤマを作っていた。管理橋は門柱の上の継ぎ目のところで最大65cmと大きくズレていた。これ程のズレを生じる水の破壊力は、ややもすれば管理橋やダム本体の決壊を招く可能性があったことは否定できない。上げられたゲートや管理橋、門柱、ダムの堤体、そしてダム上流に溜まった堆積物がなかったら、この地点での流下能力は

かなり大きく、バックウウォーターによる上流部の水位上昇や流下阻害、また、下流の水位上昇や流速増加は、当然大きく緩和されたことは間違いない。瀬戸石ダムは川の流れをせき止める構造物なのである。

【鶴・しょうこ／八代市】



写真㉑ 管理橋



写真㉒ 瀬戸石ダム右岸



図③ 瀬戸石ダムの構造図

追悼

大門のおじちゃん

上村雄一

本誌34号（2019年1月号）より

坂本駅で、お弁当を食べている、おじちゃんに会った。列車の待ち時間を利用して食事しているわけではないと思った。肥薩線の普通列車の運行回数はひどく少なく、おじちゃんは待ち時間を利用しているはずがない。人吉行きの普通列車は午前7時13分のあとは13時03分発のディーゼルカーで、八代行きも似たようなものである。利用しにくいことこのうえないが、僕には何もできない。不便なので乗客は少なく、乗客が少ないので運行便数がいつそう少なくなるという悪循環が成立し、その循環の渦の中で、僕はもがくばかりだ。

それにしても、なぜ、坂本駅でお弁当か。子どものころから、おじちゃんのことでは知っているので、不躰だけでも、疑問をそのままに伝えた。おじちゃんは、「汽車を

待つている」と想定外の返事をした。「たいぶ待たんば、汽車は来んですばい」と僕は苦笑いしながら伝えた。おじちゃんは「知つとる」とニヤリとなさった。「そんなら、自宅でお昼を食べばよかつじやなかですか」と言った。おじちゃんは、「独りでいると、死にたくなるほど、さびしくなる。だけん、外にでて、弁当を食べている」と説明した。

おじちゃんは一度も結婚したことがない。その機会がまったくなかったかは知らない。しかし結果として、独り身である。兄弟姉妹は多かつたが、戦争で、3人の兄さんたちを失った。姉さんたちは嫁いだあと、しだいしだいに疎遠になっていった。独り身の生活になってから30年以上は経つ。

10年ほど前までは、ゲートボールを楽しみにしていた。いつからゲートボールをしなくなったのかは知らない。近所にヒトが居ないわけではない。けれど、近所づきあいは苦手なようで、少なくとも孤独を意識しないですむほどには親密ではないようだ。朝起きたら、直ぐにケーブルテレビをつけるが直ぐに飽きるらしい。テレビ

は一方的に流れ、おじちゃんと会話するわけではない。

そういうことで、おじちゃんは、旧友のいる旧八代市内に行き、そこで夕食を食べ、そのあと帰宅する生活をつづけている。大門から本田商店まで歩き、そこでお弁当を買い、坂本駅でそれを食べ、旧八代市内に行き夕食をいただく、そのくりかえし。以前は、旧友たちと焼酎を楽しんでいたが、身体を壊したあと、焼酎はやめた。焼酎を飲む旧友をみて羨ましいと思えるときもあったが、

いまは、そういうこととはない。

おじちゃんは左官であつた。器用で技量があると評判であつた。弟子をとることはなかった。親方衆から仕事の依頼があるときに仕事場に行き独りで仕事をした。気楽といえ

気楽な生活であつた。いまは国民年金と相続した財産を取り崩しながら生活している。自宅は築100年を超える古屋だが、あとを継ぐ者がいないので改修するつもりはない。「カネを残しても意味がなか」とくりかえし言う。しかし、ときには「甥と姪に少しは財産は残さんばならん」ともらされる。荒瀬ダムの撤去工事が近くなつておじちゃんの自宅付近の護岸工事が急速にすすんだ。おじちゃんは、「ダムができたけん、水につかるようになった。ダムがなくなつたら工事は要らん」と言う。そういえば、おじちゃんは鮎釣りが本当に上手だつた。数えきれないほどの鮎を毎年釣っていた。おじちゃんは今もう鮎を釣らないのであろうか。たぶん、釣らないだろう。年末年始になると寂しくなる人がいる。おじちゃんはどうだつたらう。

※「大門のおじちゃん」こと稲荷正一さんは、この度の水害により流され、お亡くなりになりました。さよならおじちゃん。

【うえむら・ゆういち／編集主幹】

台掌



おじちゃんは、いつも、坂本駅構内のこの机でお弁当を食べていた（昨年1月撮影）

疫病消除の二王子神社

― 古道の残る球磨村山口集落 ―

宮原信晃

江戸時代の道路はどんな道だったのだろうか、と思うようになった。それは、球磨村は山口集落にある「二王子神社」別名「渡阿蘇神

社」に行つた時だった。神社の近くには山口釈迦堂があり仏師大円が造つた釈迦如来立像は文政五年（1822）に建立されている。お

堂を覗いても白い仏様が見えるのだ。地域的に球磨村の入り口であり、神社もお堂もあるとなると、そうとうに賑わつた地域とも想像できた。

一王子神社（球磨村渡）

冊子『球磨の鳥居』

や球磨村が出した『鰐口、鳥居庚申塔』の資料をみると、一王子神社の鳥居の願主は「井口石見」とある。井口石見といえば「美辰」、その相良三十三観音廻りの御詠歌を詠んだ人物ではないか。

「へえー美辰さんがこのころ、生きて家老として活躍してたんだ」と何だか嬉しくなってきた。

ここへくる道はどこから来たんだろうと、うろろろしてみる。神社の



鳥居に「井口石見（美辰）」の名が



前に広い道があり、そこには東から細くて狭い道がつながっている様に見える。

「よし、『ま』さんから先へどうぞ」と編集者「ま」さんに先導をお願いした。

ママシでも出そうな竹林の小道の入り口は細いが、入ってみれば意外に広くて拍子抜け。小さな小川を渡って先へ進もうとするが、大きな

竹が倒れて道を塞ぎ先へ進めない。そんな時である。「ブーン！ ガタガタ！」と列車の走る音がすぐそばでした。なるほど、鉄道がすぐそばを通っていたのだった。

明治の終わりにここに鉄道が走り、城山の付け根をトンネルが貫通し、その出入り口の真上に橋を架け、そこに国道が出来たのか。

江戸から明治の人達は、人吉か



古道を歩いていく「ま」さん



古道の近くにある肥薩線のトンネル

鳥居をくぐり鈴を鳴らしお賽銭をおあげして二礼二拍一礼。そしてここにお詣りにこられた方々が記帳されたノートを見てみた。鹿児島市内、合志市、そして球磨村内の集落名が名字となった方々の記帳が楽しい。



水害に遭った一王子神社の様子(7月24日)



右は2015年7月29日に撮影した山口釈迦堂のお祭りの様子。現在は、左のように跡形もなくなっている。

宮原信晃さんが球磨村の山口集落を取材したのは6月24日。その10日後の球磨川の大水害によって山口集落も変わり果てた姿になっていた。

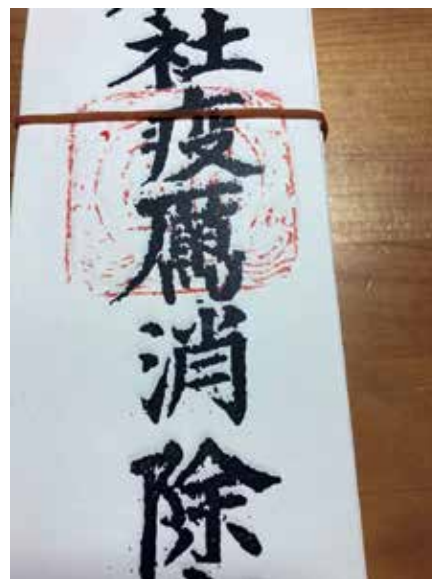
緊急報告

くまがわの神さん仏さん

その後の球磨村のお堂



神社のお世話をされている山口道人さん、平根末一さん



「疫病」を消除できるお札

「嶽本、今村、山口、田頭、大無田、地下、水篠、松野、小川、椎屋、浦野、糸原、鶴口、板崎、沢見、柳詰」と、もう一つ、鹿目町の一班から六班までの班長さんの名前が書いてあった。

みなさんが一王子神社のお札をもらってご自宅の神棚に祀り、疫病消除や昆虫消除のお札を田んぼや村

の入り口にお札を立てておられるのだらう。今でも、神様と共に生きる人たちの姿がここにあった。
「さなぼり」と書かれた文字の横に住所、氏名が記載されてある。

「二王子の神さん、お世話になりました。今年も無事に田んぼに稲を植えることができました」と記載した人のお顔も浮かぶではないか。

いつもいうことだが、日本で一番収入の低い村というが、何の、日本で一番、神さん仏さんと仲良く暮らしているのが球磨村なのである。
どうか一度、一王子神社へ足を運んで下さいませ。

【みやはら・のぶあき／宮原はり灸院院長】

大雨と洪水

精神科医 興野康也

テレビを見ていないこともあり、大雨については全く心配していませんでした。気づいたのは当日の早朝です。朝の4時台に警告音と共にエリアメールが20通以上入ってきました。数十年に1度の大雨で、氾濫のおそれがあるとのこと。たしかに外を見ると強い雨が降っています。



大雨で自宅の庭が水浸しになった

そのうち人吉市全域に避難指示が出ました。お休みどころは人吉市のはずれの丘の一角にありますので心配はごく少ないです。ですが市の中心部は球磨川のほとりであり、洪水が心配です。朝7時ごろには人吉市の下流の球磨村で洪水が起こったとの報道がありました。ザアザアと雨は降り

続けています。

洪水は僕が人生で経験したことがない状況です。朝に何度も停電が起きました。テレビ中継で見ると、人吉市の見慣れた川沿いの景色

が映り、球磨川の水位がまさに住宅のストレスまで迫っています。近くに住む人たちは生きた心地がしないでしょう。こちらの気持ちに関係なく、雨は淡々と強く降り続けています。

ニュースで球磨川上流の市房ダムが放流すると報道されました。ダムの問題点として、大雨の際の放流で下流の洪水が起きてしまうことがあると読んできました。さらに洪水が悪化するのが心配です。また何度も何度も停電しています（放流は結局中止されました）。

8時過ぎ、人吉市の氾濫の画像がニュースに出ました。見慣れた川沿いの道が濁流に飲まれています。僕は職場の病院に行く時間だったのですが、ルートをよく考えないと洪水のために職場に着けない可能性があります。

美紗さんと車で出たのですが、道

路が水浸しでバシバシ水しぶきが上がります。川のように水が流れていたり、斜面が崩れているところがあり、美紗さんが不安がっています。そのうちとうとう膝まで水に浸かるころがあり、車が止められて引き返さないといけなくなりました。僕はそこからは歩いて病院に行くことにしました。

長靴をはいていたので、すこしくらいの水なら大丈夫なのですが、太ももくらいまで水がたまっていて、歩けそうにありません。迂回してなんとか病院にたどり着きました。僕よりもずっと早い時間に主要なスタッフが集まっていたので驚きでした。なかには朝5時に出発してきた人もいました。

被害は壊滅的で、何もかもが泥水の下にあります。浮力のために、冷蔵庫がプカプカ浮かんだりしています。もはや物を運ぶ場合ではなく、人命の被害が出ないように、安全なところで待たないといけません。どこまで水位が上がるかわからないので、とても不気味でした。スタッフは悲壮な顔をしているというよりも、あまりのひどさにもはや笑っていました。

その後、水位が僕の腰になり、ピークに達しました。備蓄食を病棟に運んだり、流れ着いたゴミをどけたり、掃除をしたりして過ごしました。今日は病院から帰れないと思ったのです



運転すると激しく水が飛び散る



ここから先は車で進めなくなった

万が一の浸水に備えて、外来のカルテを2階に運んだりしたのですが、水位がどんどん上がってきます。さつきまで病院の外の浸水だったのが、外来の待合室に入ってきて、それからさらに水位が膝の高さになり、とうとう腰まで浸かるようになりました。外を見ると濁流がすごい勢

漢和字典は面白い

35

鶴上寛治

味

字形からすると「へまだ、口に入れていない」状態。それでは、旨いかまずいのかまだわからない。つまりあじがしてないのじゃないか？ いや、これからそのあじをたしかめるのだ。

口で知覚するもの以外の趣味・雅味・興味・醍醐味のように「物事の面白み」をあらわす場合もある。また、「あいつ、味な真似をしやる」という表現もある。日本には味噌・味麴のようなすばらしい発酵食品があり、この漢字の味は深い。

無

この字は《人が舞う姿の象形》で「舞（まう）」という意味と「ない」の両方の意味を持っていた。それを、二つの意味を明確に分けるため、下に「舛（ひざ）の左右の足」を付けた「舞」の字を作る一方、下に「ム」をつけた「無」の字も作り、こちらには「ない・しげる」の意味だけを残したのだそう。撫・撫・撫・撫など、どこかに「ない・しげる」の意味がこもっている。

「无（ム）」は「すでのつくり」という部首でもあり、意味は《無と同じ》。字形は《すわった人が顔をそむける形》だと。「南无阿弥陀仏」などと書かれていると「瞬？ だが《无＝無》ということとがわかれば何と言つことはない。既・概が此の部首に属する。

過

空間・時間を問わず、すぎること。あやまち（過失・過誤）の意味もある。時間的に取り返しがつかないからか。「訂正します」「削除します」がはびこる国会という所

「あやまち」は日常茶飯事。「指摘されたら、訂正すればいい」がまかり通っている。言葉が軽んじられているのだ。

鍋・鍋・渦・渦・渦などの字にも含まれる「𪛗（カ）」は「口がゆがむ」（A財務大臣の口みたい）。これらの字、どこに「ゆがみ」があるのか？ 渦・渦はなんとかわかるが、ゆがんだ鍋——私にはわからない。中味がこぼれそうじゃないか。

【つるかみ・かんじ／人吉市】

が、水の引き方は意外と速く、12時ごろには水位が下がってきました。



みるみる水位が上がり、濁流のようになった

水が引いたあとには、一面の泥が残されています。それも戸棚のなかやコピー機のなかのすみずみにまできれいに（？）入り込んでいます。午後にはひたすら掃除をして過ごしました。「よくこんな狭いところにまで入り込んだなあ」と感心とかあきれるほど、汚れています。ただ洪水の記録によくあるような「糞尿まみれの泥水の臭さ」はなかったのが、不幸中の幸いでした。

もう1つの不幸中の幸いは、土曜日に洪水が起こったことでした。日曜日を掃除にあてられます。平日ならもっと混乱が起きたでしょう。また大雨で道路の寸断や橋の崩壊なども起きていたのに、主要な病院スタッフが病院にたどり着けたことも幸いでした。

災害はいつの間にかやって来ます。現実味がないままに、ふと気づいた

ら起こっていたということがありうるのです。そのときにどう立ち向かうかは、普段の組織のあり方が出るのでしょう。危機を成長のチャンスととらえられるか、単なるダメージにとらえるかで、成果が全然違ってきます。災害は普段は見えない組織の実相を写し出すのでしょうか。

それにしても災害の前には人間の作り出したものはあっさりと崩されています。「浜辺で砂の城を作っているが、海の波に流される」という例えがありますが、人間社会はそんなものなんでしょう。災害が起こったら、ほとんどのものを諦めないといけない。また身一つでゼロからスタートになるのです。これからもそういう機会があるのだと思います。もう一度振り出しから始めましょう。

【おきの・やすなり／人吉市】



NPO 法人「BOND & JUSTICE」(後列4名)の皆さんと

で県内の支援者達を動かし、自分達が動けないぶん違った形で支援されていた。我が家の道場に一月間の予定で宿泊され、私もこの人達の心に打たれ、朝食と夕食の「飯たき母さん」となり、我が子のように接し、皆さんから「お母さん」と呼ばれ、嬉しかった。夫も毎日、買い物を手伝ってくれた。一月間を自分流の手料理でボランティアできたことは今までにない最高

の活動だったと感謝した。この36・5度を超す暑さのなか一生懸命作業して頂いた人達、本当にありがとうございました。コロナさうざいでした。えなかつたら、皆さんから両手を広げて迎えられ、喜ばれたのにと、今回は可哀想な気持ちになった。今の世の中、人を憎しみ、人と争う時ではない。皆が仲良くし、助け合う時なのだ。いつ誰が、どんな目に遭うか解らないのだ。被災地の皆さん、元気出して下さい。きつといい日が来ることを祈っています。



上杉芳野の「あがつ段」④9

神が与えた最高のボランティア

コロナ時代が終わらないうちに、またしても悲劇は起こった。七月四日早朝、ゲリラ豪雨が発生し、球磨川が氾濫し、人吉市が水につかった。球磨村では崖崩れが起こり、犠牲者さえ出た。

人吉球磨の水害の二日後に、すぐに駆け付けた団体がある。十年前の東日本大震災を体験した人達だった。その時、たくさんの人達の支援を受け、感謝の気持ちをボランティア団体として立ち上げた。自分達が味わった災害で苦しむ人達を助けようという気持ちで活動しているNPO法人

「BOND & JUSTICE」(絆と正義)という団体である。さだまさしさんが立ち上げた「風に立つライオン基金」とも提携して、共に後方支援している団体だ。その団体の代表が福島県南相馬市の大土雅宏さんである。

突然、大阪にいる娘からの依頼で、大土さん達との出会いとなった。人吉球磨に支援に行かれることを知った娘は、「人吉球磨は私のふるさとです。父母も長年ボランティアをやっている、剣道の道場に数名は泊まれると思います。父母もきつと受け入れてくれま

すよ」と、言ったそう。娘の願いとは言え、コロナのことを思えば両手を広げて受け入れる気分にはならなかったが、本人さん達は、何故人吉球磨のお役に立ちたいと、コロナの抗体検査をして、遠くからわざわざ来て下さったのだ。私達も念のため、コロナの検査をした。

本当は、調理師の免許も持ち、被災地の人達に「温かいものでも食べさせたい」との思いで、大きい鍋や調理道具などを車いっぱい詰め込んで来られた。しかし県外からの支援者は受け入れられず、電話一本

で家発見した

一枚の古写真から ④

益田啓三

「第三十七代相良頼綱と妹の弘子」

今月もわしの若い頃の写真を見てもらおうかの。
明治の中頃じゃが、当時住んでおったのは、東京市麻布区飯倉片町の相良邸でそれは大きな屋敷じゃった。邸内には母屋のほかに「洋館」も建っており、すでに電話も通じておった。糸電話ではないゾ。庭には大きな池があり、築

山や東屋などもあり、そりゃあ立派な屋敷じゃった。

写真①

わしが少年のころの写真じゃ、学習院に通っておった。写真館で撮ってもらった。ちよつと緊張しておるかの。むぞらしか？と思うがどうじゃ。

制服制帽に革靴じゃった気がする。庶民とはかけ離れておった。

写真②

わしが青年期の写真で凜々しいの。このころは世の中がきな臭くなってきたころじゃ。

なかなかの美男子と思うがどうかの、女子にもようモテたもんじゃ。

なに！ 美男子を今は『イケメン』というのか…！ うちん知らんじやった。

写真③

わたくし、頼綱さまの妹で「弘子」と申します。相良邸で兄といっしょに育ちま



写真① 学習院に通っていた頃の頼綱



写真② 青年期の頼綱



写真③ 少女のころの弘子

した。
父は頼基ですが、兄とは異母兄弟でございませう。

少女のころの写真ですが、何故か傘

を持って写ってますわ。でも洋傘でしょ。人吉あたりではまだこの頃は「バッチヨカサ」じゃなかったかしら…ホホホ。

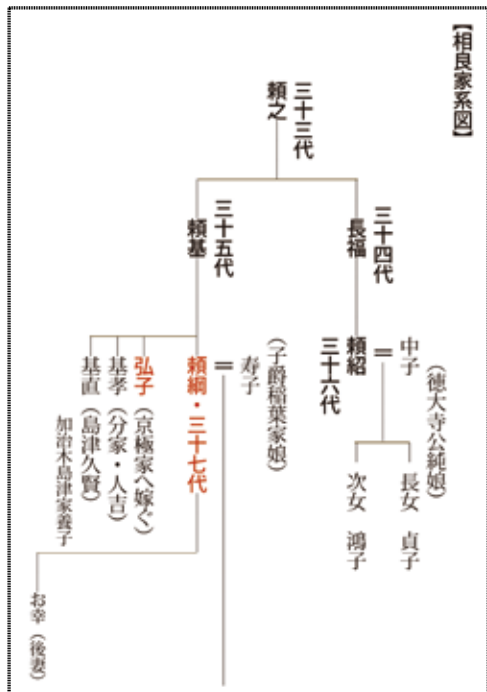
【まずだ・けいぞう／人吉市】

写真④

これはわたくしがお嫁入りの時の写真ですよ。お相手は子爵の京極高備さま。



写真④ 嫁入りの時の弘子



仁田尾神社と下岳神社をあるく

森山 学



写真① 仁田尾神社：側面

今回は八代市泉町の球磨川の支流、川辺川沿いの神社と、氷川流域の神社を紹介する。

泉町の神社の特徴としてまず豊かな彫物があげられる。栗木六大神社の鶴仙人や柿迫神社の鷹、玄武、樺木神社の菊の透かし欄間などである。

また神楽を奉納するということもあり、葉木神社や樺木神社のような大きな拝殿も特徴のひとつと言える。

その拝殿の向拝（参拝のための庇の空間）は、通常、手前に屋根勾

配をとるところ、切妻屋根や寄棟屋根として左右に勾配をとるものが多い。特に柿迫神社は反りが立派である。屋根勾配を手前にとれば、雨や雪は手前に落ちてくるわけだから、そう考えれば参拝者に配慮した雪の降る山間地ならではの工夫であろうか。

また山間地だけあつて境内へ至る道のりが急な斜面になることもある。尺間神社なんかは這いつくばって登った記憶があるが、地元の方にとってはそれが日常なんだと思う。

それではまず川辺川流域の仁田尾神社（写真①）から見てみたい。

仁田尾は五家荘のうち、左座家（延長元年＝九二三）に落ち延びてきた菅原道真の子、菅宰相の末

裔が支配した地のひとつ。この神社

も延長元年（九二三）、左座太郎と改名した菅宰相により創建されたと、棟札に記されているらしい。そ

れゆえ祭神は菅原道真公と比咩神。

社殿は流造の本殿と入母屋造妻入の拝殿からなる。その本殿の棟裏に天正十五年（一五八七）建立

と記されているらしい。とすれば、八代では数少ない中世にさ

かのぼる社寺建築と言える。先の棟札では明和三年（一七六六）造替とある。さらに安政二年（一八五五）に大補修されたものが現在の建物で、一对の石灯籠はその四年後に奉納されたものである。二〇一一年には現在地へ移築されている。

本殿の幅は柱間の数が三つで、三間社流造とよぶ。流造というのは切妻屋根だが、本殿正面を参拝空間とするため、正面側の屋根だけを長くして向

拝とする形式である。しかし仁田尾神社では前方と後方の屋根の長さに差はない。本殿が拝殿と一体になっているためである。

拝殿の奥行きは柱間の数が三つだが、本殿に近い柱間の長さは半間程度。ここはもともと拝殿に含まれるものであったか、または本殿と拝殿の間の空間で「造り合い」とよばれる部分であったか。どちらにしても、本来は別棟だったものが後に接続されたと考えられる（写真②）。

本殿正面の屋根は途中で切断され、拝殿の屋根が本殿まで延長される。造り合いの桁は拝殿の桁に継手され、軒裏は不自然に形成されている。

本殿正面の縁側は、側面が板で塞がれ屋内化している。それでも本



写真② 仁田尾神社：本殿向拝と造り合いの部分



写真⑥ 下岳神社：左から拝殿、幣殿、本殿

たる下岳神社（写真⑥）を見てみよう。創建年は不詳だが、建物は

享保十八年（一七三三）年の再建のようである。祭神は健甕龍命と阿蘇津姫命。

氷川に沿う国道四四三号からは、境内の斜面に立派な石垣が擁壁を築き、急勾配の石段がのぼっている。石段の中ほどに建てられる石鳥居、さら



写真⑦ 下岳神社：参道の石段

境内の石鳥居には阿蘇神社の社紋、違い鷹の羽紋が見られ、文政、安政、慶應など代々、奉納されてきたことがわかる。本殿、拝殿の屋根にも違い鷹の羽

にその向こうの拝殿の屋根、まさに見上げるようであり、聖域がありがたく実感できる（写真⑦）。



写真③ 仁田尾神社：本殿の妻の臺股



写真④ 仁田尾神社：拝殿の妻の臺股



写真⑤ 仁田尾神社：拝殿の小壁の臺股

殿の柱と向拝の柱をつなぐ海老のようなかたちの梁・海老虹梁や、向拝の柱の上に垂木に沿ってもうけられる部材・手挟、象鼻や柱の上の組物は隠されていない。この海老虹梁と同じ高さから造り合いの柱間に虹梁がかけられ、見た目にも一体感が増している。

本殿、拝殿ともに組物や虹梁、臺股（カエルが股を広げたかたちの束）、破風板には極彩色でペンキ塗装されている。本殿で目を引くのは妻の大きな臺股である（写真③）。たなびく雲の中央に菅原神社の梅鉢紋がある。一方、拝殿正面の妻は、同じ梅

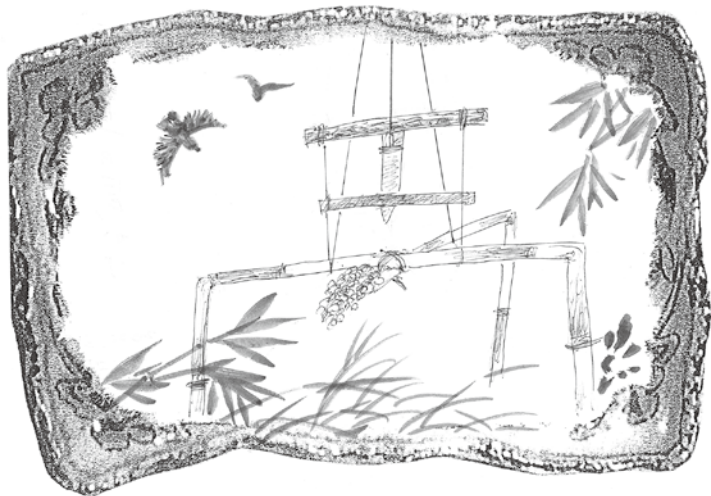
鉢紋の臺股だが、雲から水が流れ落ちて波頭を形成しているさまを描く（写真④）。また拝殿の小壁にも大きな臺股がある。人字形を形成するように、頂部から雲の筋が左右に分かれていく（写真⑤）。五家荘のうち久連子、椎原、葉木の神社では阿蘇十二明神の健甕龍神を祀っているが、左座家が支配したここ仁田尾と樅木では菅原道真公を祀っており、落人伝説を思わずにいられない。

次に氷川流域、泉町でも下流にあ

記憶の落し穂

その ⑤1

絵と文／坂本福治



鳥の罾かけ

小学四年から六年まで、私は一人で山に行くのが好きだった。やることは小鳥の罾かけである。初めは近所の島田という先輩の手ほどきを受けた。彼は山の事に詳しく、口笛で見事にメジロを集めることができた。

私が罾でねらうのは、雀ほどのホオジロだった。細い竹を切って組み立て、粟の穂をほど良い場所にはさんでおく。鳥がこれをつつくと、罾が作動して、首をはさむ仕掛けになっている。ホオジロたちは、群れをなして移動する。そんな所を選んで罾をかけ、私は遠くはなれて見守るのである。罾が作動すると、仲間の鳥たちがパツと四方に散る。かかった鳥が暴れる。すぐ取りに行けばいいが、モズに食われる時もあった。モズは必死に抵抗し、かまれた事もある。モズの食べ残しをエサとして罾を仕掛け直すと、これが見事にかかるのであった。私が鳥をはずしている間、モズは近くの木にとまって、私が罾から遠くのくのを待っていたに違いない。食糧難時代の話である。

【さかもと・ふくじ／画家、人吉市】



写真⑧ 下岳神社：本殿の丸柱上部のちまき



写真⑨ 下岳神社：猩々の彫物。下に七宝菊の虹梁

紋の獅子口がのる。本殿は三間社流造。向拝には獅子鼻、象鼻、雲文の拳鼻、鯉の手挟を見ることができ。正面の建具は半蒔（上半分を上にとり上げ、下半分は落とし込み式の格子戸）である。

また丸柱は、上方が丸くすぼまっている（写真⑧）。これを「ちまき」とよぶ。

鎌倉時代以降、禅宗寺院は禅宗様という様式でつくられてきたが、ちまきはその特徴のひとつで、その後、他の宗派などにも使用が広がった。ただ八代の神社建築でちまきが使われているのは、他に例がないと思われる。

側面の妻を見ると、右側面に

は阿蘇神社にちなんで大きな鷹が。一方、左側面は、大きな酒壺とふたりの童子といった珍しい彫物である（写真⑨）。ひとりは舞い踊り、ひとりは腰を抜かしているように見える。これは能の演目の二つで、八代妙見祭の紺屋町の笠鉾のしるしでもある「猩々」ではなからうか。猩々は汲めども尽きぬ酒壺を与える架空の生き物である。両側面とも、彫物の下の虹梁には七宝菊が刻まれている。

境内の下の氷川には沢無田橋という眼鏡橋も架けられているので、ぜひあわせて見てもらいたい。

【もりやま・まなぶ／高専教員、一級建築士、八代市】

人吉・相良文書を読む ①

辞世に見る相良家の教養

くまもと文学・歴史館友の会世話人 青木勝士

熊本県立図書館は、人吉藩主であった相良旧子爵家に伝えられた相良文書のうち昭和33（1958）年に相良家37代当主の相良頼綱氏から譲られた江戸時代から明治時代までの文書2061点を保管しています。これらは明治5（1872）年まで人吉城内の御館（現在の相良神社の境内地）の旧藩主館の蔵に保管されていました。のちに昭和9（1934）年から33年まで薩摩瀬の屋敷を転用した旧子爵家邸（現在のくまりの敷地）の蔵に保管されてきました。近代以降は個人の家文書でしたので、ほぼ一般の人目に触れられなかった文書です。

県立図書館に移管されて59年を経た平成29（2017）年4月から、人吉新聞の毎月第4月曜日の紙面で相良文

書を古い順から1通ずつ紹介してまいりました。現在まで連載45回を数え、天文15（1546）年から元禄13（1700）年の文書を紹介をしました。人吉新聞では史料紹介を主としましたので、本誌では文書から読み取れる史実をご紹介します。

今回は辞世で知れる戦国期の相良家当主の教養の水準をご紹介します。

人吉新聞の平成29（2017）年1月22日号に掲載した（天文15年）8月15日付相良義滋書状写（相良文書1）は、8月25日に亡くなる16代の義滋（58）が死の10日前に養子で17代を継ぐ予定の晴広（33）に残した漢字表記とひらが



（天文十五年）八月十五日付相良義滋書状写（県立図書館蔵 相良文書1）

な表記の遺言書です。この本文中に辞世となる「雲井より 名を吹おろす 月なれば 代々につたへん 我家の風」の和歌が挿入されています。歌の大意は「雲を払い名声を吹き下ろす月だから、代々に伝えたい我が家の家風」です。死を前に晴広に相良家代々が伝えた家風を託す義滋の心が込められています。この本歌は『平家物語』巻第二第三章「鱸」で仙洞御所の女房（後の薩摩守平忠度母）が詠んだ「雲井より 忠盛きたる 月なれば おぼろげにては 言はじと思ふ」です。

同様に永正15（1518）年5月11日に没した13代の長毎（50）は「死出の山 かねて行く日を さだめねば 今日首途しつ 身こそ安けれ」を辞世に残しています。この本歌は『古今和歌集』歌番号861（巻十六・哀傷歌）の「つひにゆく 道とはかねて 聞きしかど 昨日今日とは 思はざりしを」と思われます。この歌は『伊勢物語』普通本第125段「臨終段」で在原業平（56）の元

慶4（880）年5月28日の卒去前の辞世としても載っています。

人吉新聞の平成29年3月26日号に掲載した天正9（1581）年11月12日付相良義陽伝辞世色紙写（相良文書10）は、「蓮芳様 御辞世之写」の包紙があるので、18代の義陽（37）の辞世と信じられてきました。義陽は12月2日に響野原合戦（宇城市豊野町糸石）で御船城主の甲斐親直から攻められて戦死しました。戒名には「玉井院越江蓮芳」が付けられました。この和歌は、戦死前20日前の義陽が「老の坂 下ハうしと おもふ奈与のほ里もはてぬ 人もこそあ連」と詠んでいます。歌の大意は「老境に達したことを憂いてはならない。そこに達することとできない人もいるのだから」です。歌に込められた意味は辞世にそぐわないのですが、『万葉集』に登場する山城国と丹波国の国境の「大江山」（大枝山）の老の坂を人生の老境に懸けるところに古典への造詣の深さが垣間見えます。

義陽は永禄10（1567）年11月21日に家臣の深水民部左衛門尉長智ら20人と「冬日同詠水石歴幾年」を題に歌会（相良文書3）を、天正4（1576）年10月2日

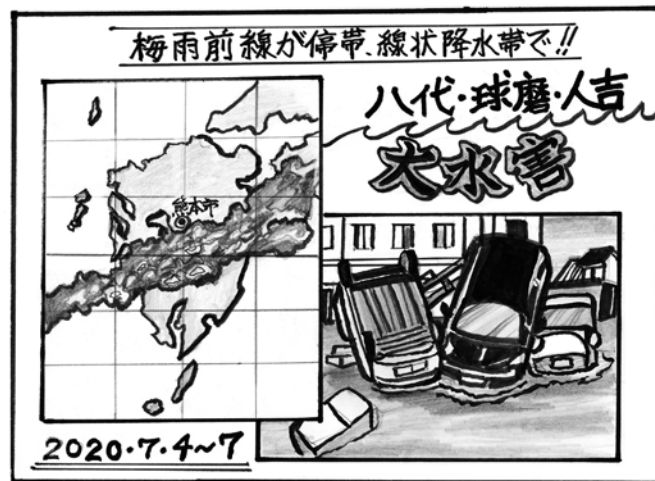
に来訪した前関白の近衛前久を招いて家臣らと歌会を開催したほか、三神和歌42首などを残しています（相良文書4）。

晴広に相良家の歴史を説いた天文5（1536）年11月22日付沙弥洞然（岡本長国）長状写（相良家文書319）では、「御連歌の事 これまた代々信じられ候ことさら蓮船公（相良為統） 菟玖波集において九州よりおひとり 御名譽に候」と連歌のことを家の名譽に挙げています。これは12代の為統（48）が投稿した5句が、明応4（1495）年に宗祇が編集した『新撰菟玖波集』に採られた榮譽を指しています。12代の為統が宗祇に認められる全国の連歌の名手であったことが、13代長每から21代頼尚（頼寛）まで続く相良家の歴代当主が連歌を愛好した根拠だったと考えられます。その結果、歴代当主は連歌を家の名譽と誇りに持ち、前関白のおもてなしに連歌会を盛大に興行したのでしょう。辞世で義滋が晴広に遺言した「代々につたへん 我家の風」とは、相良家の歴史に裏付けられた家の名譽と誇りを守ることと考えられます。

【あおき・かつし／熊本市】

つるつる…

げっかん・ぎひょう



— 梅雨末期の球磨川流域で大水害 —

八代の坂本・人吉市街地・球磨郡内で、今までに経験したことのない大水害。数多くの建物が浸水し、橋も流出!! 地球温暖化が原因の一つとの声多し!!

外来語から学ぶ英単語 (52) …… 藤原 宏

ステップ・ステップス・ステッピング step steps tepping

「joke（ジョーク）、冗談（を言う）」と「juggle（ジャグル）、曲芸（をする）」は同根で、ラテン語「jocus（イオックス）、人を笑わす言葉や行為」が語源です。

card（カード）遊びの「trump（トランプ）、切り札」の「joker（ジョーカー）、最高の切り札・ばば」は、「jokeをする人」即ち「おどけ者・滑稽な人・ふざけ屋」が原義ですが、トランプでは「どのような使われ方をされるか分からない」card（カード）の意です。

“You are joking.”（冗談でしょ）のjoking（ジョーキング）は「…している」意の現在分詞です。

野球でボールを落としそうになってまたつかむことを「ジャッグルする」と呼ぶのは、その仕草が曲芸に似ているからです。juggleは「juggler（ジャグラー）、曲芸師・奇術師」からの逆成であるとの説もあります。

juggling（ジャグリング）は「juggleすること」即ち曲芸を意味する動名詞形です。

日本語の「冗句」は「無駄な語句」が原義ですが、英語のjokeの当て字として「冗談」の意でも使われます。

(419)

リニューアル再開へ

人吉市の高木惣吉記念館

終戦から75回目の夏を迎えた7月1日、終戦工作に尽力した人吉市出身の海軍少将・高木惣吉氏の遺品や資料を一堂に集めた「高木惣吉記念館」がリニューアルし、人吉市矢黒町にある桃李温泉「季の杜 石庭」で再開した。

高木惣吉（1893～1979年）

是人吉に生まれ、苦学の末に海軍少将となり、第二次世界大戦で犠牲者が増加する一方の昭和19年、戦争続行の意志も強い中、海軍大臣の命を受け、重臣たちを説得するなど戦争終結のために奔走した。

記念館は10年前の平成22年、高

木氏の膨大な数の遺品や資料を展示し、終戦工作までの経緯、当時の状況を紹介する施設として開館。季の杜の川越郁子さんが、父である重男さんの遺志を継ぎ、温泉に隣接する自宅を改装した。

今年3月から錦町の歴史家・福田晃市さんの協力により、高木氏と地元の歴史を視覚的にも分かりやすくして時系列にまとめた。高木氏の遺品、今回特別に製作された当時の人吉町のジオラマ、資料などを通して海軍・戦争・終戦工作までの経緯を順番に知ることができる。

なお、7月の水害で会食・宿泊施設は被災し営業停止中だが、記念館への影響はなかった。

案内付きの閲覧は予約制で ☎0966・22・3637（川越さん）まで電話するとよい。



7月1日から再開した高木惣吉記念館



かつての人吉町を再現したジオラマ



順路通りに回ると歴史の流れを知ることができる

『積乱雲 海軍少将 高木惣吉』と渋谷「高木」論

八洲開発株式会社 木崎康弘

「短^{たん}綆^{じょう}はもつて深井^{しんせい}を汲む能わず」という諺がある。

出典は『荀子』。綆はつるべ縄のこと。「短いつるべ縄では、深い井戸水は、とうてい汲み上げられない」の意。

渋谷敦は、著書『積乱雲 海軍少将 高木惣吉』（以下、『積乱雲』と略す）の最後に、この諺を引き合いに出した。そして続けて、「いま、この古語が私の胸を刺す」との一文で締めくくった。確かにそうだろう。「少年の頃の昭和

日本を救った高木惣吉」に立ち向かった、渋谷だからこそ、発せられる感慨なのだろう。だからといって、決して悲壮感を漂わせるものでもなかった。

それは何故なのか。

『積乱雲』は、もともと熊本日日新聞夕刊に掲載された「歴史小説」だった。その連載予告の中で、渋谷は、こう使命感にも似た意気込みをみせた。

「かつて高木さんに『日野熊蔵伝』を送ったとき『弁護者・敬仰者・ファンの作家より、進んで真実追求の批判者となれ』と訓示されたことがあったが、今がそのときだなと思う。『仕事は上機嫌でやれ』が私のモットーだから、高木さんの膝下に居れる喜びにひたりながら、完結を目指したい。」



初期、学校」でよく聞かされた三吉の一人、「中学校にも行けなくて独学で海軍兵学校に合格」し、「一億玉碎の悲劇から、命賭けで

そして、「平成十一年十一月から翌年の五月十六日まで」連載は続いたのだが、そこに感じ取れる使命感とは、何だったのか。

そこで、これら「何故」と「何」を手繰り寄せながら、『積乱雲』でトレースしたかったこと、つまり渋谷「高木」論を序開きしよう。そしてまた、本年七月一日の「高木惣吉記念館」のリニューアルを記念しよう。

「海軍少将高木惣吉」を書くことは、以前からの私の念願だった。

渋谷は、『積乱雲』の冒頭を、このセンテンスで飾った。では、それは、いつの頃だったろうか、との疑問は、必然として頭をよぎる。そこから始めてみたい。

渋谷は、一九五八（昭和三十三年）に、水俣出身で、谷川健一の弟の谷川雁が主宰して創刊した雑誌「サークル村」に参加した。そこで、石牟礼道子を見知るのだが、熊本市内の会合の帰り際の街中、「俺は日野熊蔵を書く」と語った渋谷に、石牟礼は「私は、水俣病を書く」と応じた、という。その後石牟礼は、一九六九（昭

和四四）年一月に『苦海浄土―わが水俣病』（講談社）を上梓することになった。片や、渋谷はというと、「航空五〇年」を記念した祝賀イベントが日本各地で開催された一九六〇（昭和三十五年）年、徳川好敏が国内外で脚光を浴びていたことへの、ある疑問が脳裏をよぎった。

「初飛行五〇周年の、これらもろもろの祝賀行事の席上、日野氏の名はなぜ出なかったのか。徳川氏はなぜ日野氏のことに触れたがらなかったのか。」この疑問こそが、『人吉文化』の「日野熊蔵氏略年譜」（一九六六年）に始まり、一九七七（昭和五二年）年の『日野熊蔵伝―日本航空初期の真相』と形を成すエネルギーとなった。そして、その後の郷土人物伝の幕開けともなっていた。またその想いは、日野や徳川に止めない、「宮忠八、八頭良一、丸岡桂など」の「日本航空界の先駆者たち」もまた等しく顕彰しようとの目論見に満ちた『飛行機60年―日本の空の開拓者たち』（一九七二年）を書き上げた。さらには、日野の初飛行を成功に導いた功労者の一人、気球隊長の徳永熊雄を世に出す、『日野熊蔵伝』の「いわば姉妹編ともいふべき」『空のモッコス―徳永熊雄伝』（一九八二年）と続いていった。

こうした日本航空史としての人物伝だが、それはある一面、日本帝国陸海軍の航空戦略の一端を炙り出す作業ともなっていた。第二次世界大戦終盤、緊迫する戦局悪化の中に、一九四三年（昭和一八年）に挙行された学徒動員で従軍した経験を持ち、戦場に散っていった多くの学友たちに想いを馳せてきた渋谷にとっては、それは一つのエレジーでもあったのだろう。実は、その中で、ある一人の人物に迫ろうとしたのが、『人吉文化』第四十号に書いた「吉岡文六小伝―東条首相を赫怒させた男―」（一九六四年）であり、その後、加筆して出した『無冠の帝王―ある新聞人の生涯―』（清風書房、一九六八年）である。

一九四四（昭和十九）年二月二十三日付け『毎日新聞』二面に事が発して、ある事件へと発展した。そこに躍った「勝利か滅亡か戦局は茲まで来た」の大見出し、南方防衛線の窮状を解説し、「竹槍では間に合はぬ飛行機だ、海洋航空機だ」と海軍航空力増強を説いた戦局解説記事だ。この記事に激怒した東條英機は、当然の如

く、毎日新聞社に圧力をかけた。それは、熊本県出身で、八代中学校（現・八代高等学校）を卒業し、陸軍士官学校（三十二期）、陸軍大学校（四十期）卒の、大本営報道部長松村秀逸を通じて行なわれた。その圧力とは、掲載紙の発禁、編集責任者と記事を書いた記者の処分を命じたもの。ところが、人吉出身で、編集局長だった吉岡文六は、記事を書いた海軍省記者クラブの新名丈夫の進退伺いを受理しなかった。そして、替えて、編集局長兼整理部長加茂勝雄と共に、自ら三月一日に引責辞任した。敗戦後、「竹槍事件」として、「横浜事件」や「大阪商大事件」、「尾崎不敬事件」、「新興俳句弾圧事件」と並ぶ、戦時下の言論弾圧事件と評されることになった事件だ。

実は、この吉岡と高木は、その三か月前の十二月二十日昼、「有楽町駅前の毎日新聞社」で面談していたという。その中での一部始終を、渋谷は、取材で聴き出した「田中東亜部長（香苗氏、のち社長）の直話」を交え、「吉岡文六」の中で綴った。関係箇所を抜き書きしておく。

惣吉がその席で語った時局談の一語一語は、静

かではあったが、一同を異様な緊張と暗澹とした
想いに引き込む迫力があつた。

「戦争はここまで来た。日本の前途には、絶望
という名の道だけが横たわっている。勝てない戦
いをいつまで続けるつもりか」

(中略)

惣吉の言葉は、一同の胸に突き刺さる。

(中略) 軍部の報道管制は、中国事情について
も目に余るものがある。これまでは堪えてきたけ
れど、このまま黙っているのはジャーナリストとし
て、国民として許されない。事実を残らず書き
立て「これが真実だ」と国民の前にさらけ出す。
報道の使命とはそれなのだ。惣吉が帰ったあと、
吉岡を囲んで沈痛な決意が固まった。

こうしたやり取りがあつたようだが、一九六三(昭和
三八)年の夏休みと推察される高木への聴き取りでの、
当の本人の反応は「何を話したか忘れた」とのこと。と
はいえ、同郷の士が、立場を越えて、「日本の前途」を
憂う点で一致し、方や国を救うために東條暗殺を企て、

が心根にあつたのではないか。ましてや、国の危機的状
況の中で、ギリギリの調整を行いながら、戦争の終結に
尽力し、戦後には東久邇稔彦内閣の副書記官長として、
何百万人もの海軍兵を無事帰還させつつ、百万に及ぶ連
合軍の平和進駐を実現させるなどの、戦後処理にも奔走
していた高木の姿から照らせば、何をか言わんやだ。お
そらく、それらを一字一句書き綴る渋谷に去来したのが、
「いま、この古語が私の胸を刺す」との弁だつたのでは
ないか。

そうした想いを込めてだろうか、渋谷は生前、こう語つ
ていた。

「それは侵略戦争」つていうことを聞けば、悲
しゅうなる。自分は侵略のためとは思ふとらん。
母や身近な人たちを護るために、銃バ持っただけ。
また、『積乱雲』の「はじめに」の中でも、そのこと
が書き表されていた。

「今頃、何で軍人のことを、馬鹿な」という人
もいるが、(中略)

「軍人だったから」と、これを否定するのは、

方や「東条首相を赫怒させた」ことは誤りの無い歴史だ。
おそらく、渋谷は、まさにその時に『海軍少将高木
惣吉』を書くこと」を視野の中に入れたに違いない。

「吉岡文六小伝」の取材で高木に会つたのは、戦後
十八年ほどしか経っていなかった頃だつた。当時、戦後
復興の象徴としての東京オリンピックの前年で、日本経
済が飛躍的に成長し、「夢の超特急ひかり号」も現実の
ものになりつつあつた。その反面、ひずみに満ちた街中
には、社会や政治に目を反らすことなく、理想や平和を
想い描く若者たちで溢れていた。

一方、『積乱雲』の連載は、戦後五九年も経過してしまつ
た頃だつた。当時、コギャル文化に替わってヤマンバファッ
ションが出現したり、非正規雇用が増加し始めたり、教
育現場での君が代斉唱や日章旗掲揚の問題化によつて国
旗国歌法が成立したりと、社会にも政治にも空虚さが
漂い始めていた。

これらの時間の経過には、如何ともしがたい社会の変
貌があつたわけだが、渋谷には、それを憂慮する気持ち

戦後の「戦争放棄」の憲法の問題に則つての自粛
で、それはそれでわかるけれど、だから、かつて
の軍人が全部駄目だつた、ついでに「戦争」に参
加した祖父や祖母の世代はみんな戦争犯罪人だ、
謝罪しなさい」などと、子や孫たちに言われるこ
とがあれば、私は悔しいし、戦争で死んだ人た
ちだつて浮かばれはしまい。そのために、私は
高木惣吉を書きたい。

戦後七五年の日本には、平和と自由に満ち溢れてい
る。そんな日本を造ってくれた恩人の一人が高木だつた
ことは、『積乱雲』を読めば明々白々だ。と同時に、政
治にも、社会にも、マスコミにだつて、「忖度」の流行語
に象徴される風潮がまかり通り、「戦争美化」の論調さ
えも珍しくなくなり、高木の置き土産が危うくなつてき
ている。『戦争』に参加した」世代や「戦争で死んだ人
たち」が浮かばれるためにも、それへのレクイエムの意
味をも込めて、渋谷のメッセージを感じ取りたいと思つ
ている。

【きざき・やすひろ／熊本市】

茶もみ唄

上村雄一

八十八夜になると(新暦の5月1日から5月2日頃)、予定調和を履行するかのよう。茶葉が伸びる。柔らかく甘い香りのする若い茶葉がいきおいよく葉を広げる。その若葉を摘み、天日で干し、大きな釜に入れて茶葉を煎り、そのあとで、炒った茶葉をゴザに広げ手で揉み、それを天日で乾かし、ふたたび大きな釜に入れて炒る。その作業をくりかえしていくと、若い茶葉の水分は失われて、乾燥しきった茶葉になり、「お茶」は完成する。乾燥させた茶葉を急須に入れお湯を注ぐと、コクのある香りのする「お茶」として飲める。

製茶に利用する茶葉は若葉でなければならない。若葉は、1週間もすれば、固い茶葉に「成長」するが、その茶葉を飲用茶葉に製茶することはないし、製茶しても飲用茶葉にはならない。八十八夜を中心にする一週間ほ



茶摘み。茶畑として十分に整備されていないが、摘みやすいように小道がつくられている。エンブリー写真資料(1936年5月、あさぎり町教育委員会提供)より

どの間の若葉でなければ、「お茶」はできない。

製茶の作業は右のとおりでひどく単純な作業で誰でも簡単にできる。ただ重労働であることも疑いない。茶の葉は薄く、いくらを摘んでも製茶にまわせるほどの量にはならない。早朝から陽が落ちるまでひたすら摘み、ひたすら干し、ひたすら炒り、そして揉み、天日でかわかし、ようやくできる。

茶葉は直ぐに発酵する。発酵させないために、夜通し、



茶摘み。ここの茶畑は整備されているようだ(あさぎり町教育委員会提供)



写真の左上では女が茶葉を釜で炒っている。長時間にわたって釜を炊くので熱くきびしい作業である。昭和40年代後半まで球磨川流域の各地で同様の光景がよくみられた。右下では、炒った茶葉をゴザに置き女たちが揉んでいる。茶摘み、釜で炒る、揉む、天日で乾かす作業は同時並行的におこなわれた。(あさぎり町教育委員会提供)

団扇で茶葉の熱を冷ます作業も欠かせない。そうやって、著者が生まれ育った地域(旧坂本村荒瀬)では茶葉をつくっていた。一家総出の作業で、できあがった茶葉は親族の間で平等に分配し、1年分の茶葉として保存・利用した。

須恵村を研究したエンブリーの写真をみるかぎり、昭和15年の須恵村の製茶方法と旧坂本村の方法はほとんど同一である。おそらく、旧坂本村だけでなく、球磨川流域全体でも、同じやり方で、茶を摘み、茶を揉み、炒り、乾かしたのであろう。

「お茶」というまでもなく嗜好品、そしてぜいたく品で、いまでも贈答品として通用・利用している。時代を遡れば、江戸時代、球磨相良藩は茶を専売品にし、藩の基幹産業のひとつにしたほどであった。その影響はいまもつづいていて、

球磨地方の茶は「球磨茶」として知られている。昭和40年代初頭まで、小学校・中学校、そして高校（たとえば人吉高校）には茶園があつて、茶摘みは「授業科目のひとつ」にしていた。球磨のなかでも、特に錦町・相良村の高原地域の茶葉を美味しいと多くの人は語る。五木の茶が美味しいという人も多いが、好みは人それぞれであつて、どのお茶もあじわいがあるというほかない。



炒った茶葉を天日で干している
(あさぎり町教育委員会提供)

坂本の茶はどうか。九州大学法学部で助手をしてい

たころであつたと記憶しているが、大実家の茶葉を先生方に味わっていただいたことがある。（たとえば、法社会学の畑先生など）。畑先生は「典型的な番茶です。香りがよ

く、美味しい」とおっしゃった。たぶん、畑先生のご指摘のとおりであろう。手元の『新明解国語辞典』第七版によれば、「番茶」を「品質の劣る煎茶」ということになるが、その評価でいい。「品質は良くても」コクのないお茶もあるし、その逆もある。

くどいことを承知でいう。茶摘みにはじまる一連の製茶作業は、田植と同じく、単純ではあるが、長時間で、それ故に厳しい重労働である。こういう作業をするときには、人々は唄を歌い、気分転換を図り、疲れを取ろうとする。三原竹二編著『人吉・球磨民謡選集』（羽山プロジェクト・オフィス 1998年9月26日）は次の唄を収録している。

茶もみ唄

もめたもめたよ ござの茶がもめた
もめばござ茶も 香茶となる

娘ア色づきや 男好き

今夜来なはれ ばばさんひとり
耳もきこえにや 目もおい

そいじゃ今夜来る どの間に寝ろか
東納戸の 次の間に

ふらりふらりと ねむ気がついた
昨夜様じよと なが話

「ござは「焼き畑」のこと。「ござ茶」は焼畑の茶を指す。「嬢」は「かかあ」と読み、茶摘みが数少ない現金収入であつたことを示している。

前半は「茶」の唄だが、後半になるつれ、「ヨバイ」の歌詞になっている。辛い仕事を恋心でいやしたのであるう。

声はすれども 姿は見えぬ
あれは深山の ほととぎす

五木ア茶どころ 茶のえんどころ
五木アよか茶の 出るところ

球磨の茶つみに 一度はおいで
おじま茶つみで 嬢貰った

銘茶香茶よりや 五木の茶よりや
さまがわかしだ 白湯がよか

今度別れて いつまた会える
明けて四月の 茶つみどき

あくびだらけで 茶つみの出来に
あくびア手じゃせぬ □でする

じいさんな焼酎好き ばあさんな茶好き

牛のぶく

上田精一

先生、やっぱダメでした

卒業したばかりの俊夫から手紙がきた。直ぐに封を切った。もしかしたらダメだったかもしれない不安と、彼だったら上手くこなしているとの期待が心中でないまぜになっていた。緊張すると俊夫は人前で話せなくなるか、「どもる子」であった。俊夫は、就職先の寮で自己紹介できなかつた。一言も話せず、先輩に代わりに紹介してもらったというのだ。不安の方が的中してしまった。

人吉二中（人吉市立第二中学校）に赴任し3年目に彼の担任になつ



昭和38年度 人吉一中卒業記念写真

た。当時の人吉一中はマンモス校だった。1学年で580人を超える生徒がいた。3学年を合わせれば1700人を超える生徒がいた。その1700人の生徒の一人が俊夫だった。

生徒数のもつ意味は大きい。多様な生徒と交わる点がある一方、その利点がいとも簡単に短所になりうる。小学校時代からつきあいのある生徒であれば、彼の「ドモリ（吃音）」を笑うことはなかっただろう。むしろ、彼の本読みを応援したにちがいない。けれどマンモス校である。彼が本を読んだり、発言したりすると、どつと笑い声起きた。吃音を嘲笑してはならない、と大人の常識は教える。けれど、生徒はときに「残酷」であつて、彼を嘲笑する動

きはやまなかつた。放置すれば俊夫は傷つき、嘲笑する生徒たちも駄目になる。新米教師の私はどうしたらよいか、くりかえし考えた。そして、ある日の国語の授業で、私は思い切つて生徒たちに宣言した。

「君たちは、俊夫の身になって考えたことはないのか。俊夫の『どもり』を治せるのは君たち以外にない。俊夫が『どもっても』絶対笑うな」

俊夫に対しても、

「負けるな。一時間に一回は本読みをあてる。がんばって読むのだ」と言った。

私は宣言を実践した。教育方法として問題がある授業方針でないかと疑問をもつ人がいるかもしれない。批判する人がいれば、その批判を甘受しよう。しかし、私は宣

言とその実行は間違つていなかったと確信している。教育は形式論ではない。子どもを中心に置き、授業を組み立てることが教育の基本である。俊夫と彼のどもりを嘲笑する生徒たちの姿を頭にうかべながら、宣言の方向で授業を組み立てることにした。俊夫は額に汗をにじませながら「本読み」をがんばった。最初の頃は笑っていた「ワルゴロ生徒たち」も静かに聴くようになった。

学期末には俊夫を励ますようになった。俊夫に「本読み」をあてるのを忘れるときがあつた。そのとき、「先生、俊夫ば忘れとるばい」と「非難の声」がでた。うれしい「非難」であつた。俊夫は、しだいに読めるようになった。たどたどしい読みながら、1頁程度は読めるようになった

た。俊夫が1頁をどもらず、読み間違えず、読み終えたとき、教室内から拍手がわきおこつた。大きな拍手だった。70年近く前のことだが、あのときの光景はいまでも目に焼きついている。

俊夫は「集団就職者」であつた。その年（昭和37年）の卒業生は男女合計584人で、高校進学率は65パーセントであつた。

俊夫の就職先は岐阜県多治見の陶器会社であつた。定時制高校を受験するため、いくぶん早く彼は人吉を離れた。人吉駅で列車に乗り込む俊夫を彼の同級生たちと一緒に見送つた。女子生徒は泣いていた。俊夫は小声で私に云つた。

「定時制高校を卒業するまで決して帰りません。四年後に帰つたとき

は先生のところに一番に向かいます」と。私は胸が熱くなった。彼の両手を握りしめ、「さびしくなったら同級生たちを思いだせ」と伝えた。そして「この本を読め」と言つて吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』を渡した。なぜ、吉野源三郎の本にしたのかは今では覚えていない。

俊夫からの手紙をみて直ぐに返事を書いた。今だったら電話で励ますこともできるが、当時は手紙を書く以外になかった。「慣れてくればどもらなくなる。自信を持て」と書いた。

仮名の生徒

それから4年後、俊夫は私のもとにやつてきた。新調したばかりの

背広姿で彼は云った。「定時制高校を卒業しましたので、約束どおり先生に、その報告にまいりました」と。彼は誇りに満ちていた。晴れ晴れとしていた。球磨訛りは抜けていなかったが、どもらなくなっていた。彼には邪氣がない。だから他人様に嫌われることはない。そして、なによりも彼は我慢強かった。彼は進学して勉強したかつただろうが、それを口に出すことはなかった。中学時代の成績は必ずしもよくなかった。勉強の基本は国語力にある。吃音も関係して、その国語力が不足していた。しかし、勉強は好きであつた。どうしても高校に進学しなかった。詳細に触れることは避けるが、経済的事情が通常の進学を彼に許さなかった。「成績が悪いので、定時制

高校を選んだ」と彼は笑いとぼすが、必ずしもそうではなかった。

彼は進学だけでなく、部活もできない生徒であつた。陸上の短距離競走に強く、ソフトボール好きであつた。長兄の営む農業の手伝いが彼の「部活」だつた。彼は、そうした事情を口に出さず、自己が置かれた状況のもと、「牛のように進む」生徒であつた。澤宮優著「集団就職」が記しているように、働きながら通学するのは容易ではない。仕事による疲労、街の誘惑などもあつて、たいていの者は卒業するまでにはいたらない。俊夫のときも同じで、同期入学者で定時制を卒業したのは彼ひとりであつた。高校どころか、会社を辞める者も少なくなかつた。

彼は辞めず管理職に登りつめ



俊夫が造ってくれた記念の湯呑み

た。それは彼の誇りであろう、しかし、彼はそれを自慢しない。むしろ「悪いこともした」といつて本名を公表されることを嫌う。彼については幾度も文章にした。彼の意向を尊重して、すべて仮名にしている。今回もそうした。社会的には彼は

成功者である。しかし、彼の名前が表舞台にすることはない。集団就職者は高度経済成長の担い手で、彼らなしに現在の日本は語れないのだが、彼らの名前が表にすることはまづない。大半は無名・仮名の「集団就職者」として一括されてしまうが、私たちは彼らが「具体的個人・人格」であるという単純な事実を見失つてはなるまい。

生の証

俊夫は生真面目一筋に生きてきたわけではない。特に、アルコールにまつわる失敗談が多い。そのあたり私に似ている。先に触れたように、俊夫は仮名だが、彼はその足跡を消し去ったわけではない。私はいくつかの本を書き、いくどかその出版

記念会を開いていただいたが、その場に彼はいつも参加し、そのたびごとに彼が上塗りをした陶器を記念品として造つてくれている。その陶器を眺めるたびに、彼が陶器会社に集団就職し活躍したこと、どもりで苦しんだこと、それにもかかわらず定時制高校を4年で卒業したことなどの記憶が直ぐによみがえる。彼は陶器を通じて彼の生の証を私に示しているように思えてならない。

その後、俊夫は会社を定年退職した後、地元の老人ホームの夜警をしながら、老人会の会計担当をしたり、ホタルの観賞組織を立ち上げるなど、地域に根づいて穏やかな日々を送っている。

【うえだ・せいいち／南島原市】

「万年二等兵」について

この戦争体験記は、今から二十五年前の平成七年（一九九五）、あさぎり町岡原出身の尾方豊水先生によつて執筆されました。「戦後五十年の節目に当たり、悲惨な戦争の思い出を記録に残して、又とあつてはならぬ戦争のみじめさを讀みとつて貰うために拙筆をとりました。」と、先生の木上小学校時代の教え子である新堀徳人志さん（87歳）への寄贈の手紙に書かれています。



晩年の尾方豊水先生

尾方豊水先生は、
木上小学校勤務中

の昭和十九年夏に召集され、中国戦線に送られました。そして、二十年八月の終戦を現地で迎えられ、昭和二十一年二月、帰国されました。

これを読むと戦地の様子が手にとるようにわかりやすく描かれています。

帰国後、教師に復職され、岡原小・四浦小・人吉東小などに勤務され、黒肥地小の教頭を最後に退職されました。

退職後は悠悠自適の生活をされ、夫婦そろつて百歳の祝賀会を迎えられたことです。先生が百四歳の少し前、平成二十七年九月に逝去されました。ご冥福を心から祈ります。

「又と戦争を起こしてはならない。大損失だ。大悲劇だ。大破壊だ。」と言われる先生の願いを引く継ぐために親族の了解を得て紹介することにします。

錦町 新堀徳人志
〃 尾方 保之

ある教師の出征の記録

万年二等兵 ①

尾方豊水

今日は県の巡回映画が巡つて来るというので浮き浮きした気持ちで、講堂を真つ暗くするため暗幕を張り巡らしていた。テレビなど全然夢にも思わなかつた昭和十九年のことで、久方振りに巡つて来る映画は最大級の楽しみの一つであつた。

そこに用務員の増永さんが息咳き込んで、

「尾方先生！ 赤紙ですよ。」

と手渡しにやつて来た。

来るものが来たなあ。木上小学校でのことである。

当時、六年男子組を担当していた。教え子たちに別れの挨拶を済ませて、廊下を急ぎ足で引き上げていると、教室から大声でざわめく声が聞こえてきた。

これではならぬと教室へ引き返した。

「皆落ちついて、このあと担任して頂く先生と真剣な勉強が出来るよう頼むぞ。」

と諭し残して、いよいよ岡原の我が家へ出征の支度に帰ることにした。

熊本西部第十六部隊へ

いよいよ出征の門出の日が来た。斉堂の牛馬の品評会場が出征兵士の別れの集合場所であつた。

出征兵士四名を代表して挨拶、

「ただ今から征つて参ります。銃後のことはよろしくお願い致します。」

歓呼の声と日の丸に送られ、免田駅へと向かった。

その日のうちに熊本西部第十六部隊へ入隊の運びとなった。

入隊してはじめて軍隊というところの実態をにがにがしく体験することになった。第三中隊の第五分隊に七名の新兵が配属された。

そこで展開されたのが何と、古兵が言うことがふるつ

ている。

「今日入隊した七人のおとちゃん達、皆その一段高かところに並びなはり。そっちの端から、郷里には子どもが何人居るか言うてみなはり。」

全く人を馬鹿にした言いぐさである。

皆かしこまつて、

「はい、三人居ます。」「はい、五人おります。」「とまじめに答えた。

「よし、あんた達は早速、戦地におもむくことになる。今から途中で食う飯米は配るけん、今もうた靴下ば持つて集まんははり。」

そこで皆、ま新しい靴下を持つて米を貰いに並んだ。

すると、これが振るつている。あねさんかむりの古兵が台の上にすわつて、

「はい皆、靴下ばひろげて順々に並びなはり。」

と、人を馬鹿にした口ぶりで、米を靴下に流し込んでくれた。

そのあと服から靴から必需品が次々に配られた。

貰った靴も大きいし、服も袖から手が出ないほど大き

いものであった。

「靴も服も体に合いません。交換して下さい。」と頼んで驚いた。言うことが又々振るつている。

「軍隊ではなあ。しゃばと違うばい。服もなあ、靴もなあ、体に合わすところじゃなかとばい。靴も服にもなあ、体は合わすつとばい。ぜいたく言うちゃならんとはい。」

と言つて交換どころの話ではないのである。

その時、板張りの廊下に軍長靴のズシンとした音が響いたかと思うと、今まで我がもの顔で威張りちらしていた古兵の様子が一変した。

「氣をつけ!! 敬礼」

誰かと思うと中村先生であつた。いや、中村中尉殿であつた。

実は中村中隊長殿は、木上小学校で同勤した先輩で、学校では小生の方が上位にあつたが、軍隊では月とすつぽんである。

「尾方先生、とうとう召集令が来ましたか。大へんですなあ。何か私に出来ることで頼みはありませんか。」

という有難いお言葉である。

「はい実は、家内が衛門近くの旅館に長男（四歳）を連れて別れに來ていますが、一目会いたいと思ひますが。」

「おやすいご用です。早速一しよに参りましょう。」

何とうれいおとりはからいでしょう。一兵卒では思ひもよらぬ中隊長と外出が出来たのである。

旅館には家内が四つになる長男と待ちあぐんでいた。

沢山のぼたもちを持参していたので有難く頂戴した次第である。

隊に帰ると古兵達の態度ががらりと変わった。

「尾方二等兵、あんたは中隊長と知り合いか。これからあんたにはめつたなことは出来んなあ」

それから別人のあつかいで全く極楽に行った様だつた。

出陣式

夕方になつて、

「出陣式があるから外に出る!!」

との連絡があり、急ぎ足で外庭に集合した。

「今夕には直ちに出陣である。認識票を渡す。これは普段身につけておくもので、戦病死した時に誰であるか判断する大事なものである。そして封筒を渡すから氏名を書いて、その髪の毛と爪を切つて入れて差し出すように。」

これが遺品になるのである。何か緊張した氣分に襲われた。

夜中になつて出陣出発である。

真つ暗いから、どこへ行くのやら、さっぱりわからぬまま肅々と歩いた。

途中、竹竿に名前の入った提灯をぶら下げ、打ち振り打ち振り別れを惜しむ家族のざわめきである。

親だろうか妻だろうかつらい別れである。

全然わからない神社の境内で、武運長久を祈る。

祈願もそこそこに、いつしか駅に到着。

熊本駅かしら? 上熊本駅かしら?

牛馬を運ぶ列車の中にギューギュー詰めになつて一路、目的地に向けて走り続けた。

港に着いた。博多港らしい。船中の人となる。船中といつ

ても階段を次々に降りた船底である。恐らく海面下にちがいない。まるで蒸し風呂に入った様でじつと坐していても汗が流れ出る。

生き地獄である。

小生等教員の同輩は学歴をかわれてか、それぞれ暫時の分隊長殿であつた。

星一つの二等兵ばかりの集まりであるが、分隊長殿と呼ばれると悪い気はしない。

大陸へ

夜が明けて下船して驚いた。朝鮮らしい。白い衣服が朝鮮人の服装だなあと直感でわかつた。

いよいよ大陸に渡つたのである。

またもや貨車中の人となる。満州には入つたのか移り変わる風景が雄大である。見馴れぬ獣がひた走りに移動している様は日本では全く見られぬ大陸的風景である。

とある駅に貨車が止まつたまま動かない。変だなあと思つてゐると

「兵隊の中で銃を打つた経験のある者は下車せよ!!」との命である。

「駅の周辺にシンシ軍（共産軍）が出没している。撃退するため、しばらく停車する。」とのこと。

誰一人下車する者は居ない。しかたなく数少ない古兵たちがおぼつちた様子。戦場に踏み込んだなあという緊張感がよぎつた。貨車はまたひた走りに走る。

動物になつて貨車に詰め込まれた兵士達は、外の景色を眺めることも出来ぬまま不安続きで、とある駅に停車した。よくわからないが駐屯地として滞在するらしい。

街の名まえも知らされないまま駐屯することになつた。ここに来て三度三度の食事が不足がちで、ひもじい毎日が続いた。

内地を出る時、日本の貨幣を充分ふところにして来た者は、支那人（当時の呼び方）から食糧を入手して腹を充たすことが出来た。土地の住人が籠の中に食品を入れて、かくれがくれ商売にしのび込んで来るのである。

その当時、土地の住人は食塩と物々交換するのを願つてゐるようだった。

小生は国を出る時、きめられた貨幣の額を正直に守つて、たらふくふところにして居なかつたため、現金はあつという間に皆無になつてしまつた。ひもじい日が続いた。

ある日、ふと傷病兵がタン力で運ばれるのがいたいたしく目にとび込んで来た。

その中に和泉勝君（久米小学校勤務）が運ばれていたのである。戦地の第一歩で、こんなことになるうとは。

あとでわかつたのだが、彼は此の地で昇天したのである。合掌

一方、厳しい訓練は毎日続けられた。

戦争にかり立てられて銃は四人に二丁くらい。銃の打ち方も知らない兵隊の訓練は明けても暮れても、

「気ツツケ」「前へ進メ」「まわれ右前へ進メ」「ホフク前進」

をくり返し、単調そのもので、これが何に役立つのか。

果たして戦争に勝てるのか、不安がつるばかりである。駐屯は終わった。再びギョウギウギウ詰め貨車の人となる。

どこへ何のため移動するのやら極秘中の極秘である。知るよしもない。

昼夜分たずひた走るうちに、とんでもない大きな河にさしかかつた。揚子江であることがわかつた。

味噌汁を押し流す様な逆巻く濁流には驚きの目を見張つた。

第二の駐屯地は南京だったのである。

南京といえば支那で第二の大都市である。

ところ変われば品変わるで街の路上を鞭一本で何頭かの豚を誘導しているのには驚いた。

一方、アヒルの群をこれ一本でうまいこと誘導しているのである。

支那にはクリーク（貯水池）が各地に点在している。このクリークに何羽いるか数え切れない程のアヒルが群れ泳いでいる。

このアヒルをねぐらに誘導している風景だったのである。

この南京の一角で、前の駐屯地と同じ様な訓練がくる日もくる日も続けられた。うんざりである。

（つづく）

【おがた・とよみ／球磨郡旧岡原村（現あさぎり町）】

瀬戸致行という人そして私 —— 出会いから別れへ—— ①

高校5期会 東喜代雄

はじめに

私ごときが「瀬戸致行」という偉人の航跡に触れることは、おこがましいのです。でも誰かが記録しておかなければなりません。友人知人たちの続稿を期待しています。

今日は2020年5月初め、日本中いや世界中が新型コロナウイルス感染症の恐怖に怯えています。瀬戸君がいたら「僕の専門ではないー」など言わず、走り回っていたことでしょう。各地で医療崩壊と向き合いつながり、必死に戦っている医師、看

護師、スタッフ、研究者、国、自治体の関係者、さらに企業、商店生の連合会、休校・休園中の児童・生徒・学生、幼児と、彼らを家庭で守っている保護者など、すべての市民に報恩・感謝の気持ちをこめて一筆しておきます。

エピソード

1. 2010年3月、私の幼稚園に福島紀子さんが、叶きようという名の4歳の男児を連れてやって来ました。入園手続のためで

す。ご主人が近くの航空自衛隊入間基地に転勤になったのです。出身は九州ですと言っているので「私は熊本県人吉ですよ」と言うと、「へー、世ん中は狭かですねー。私の母（旧姓・桑原愛子）は大畑の麓町です。人吉というのを忘れられん人がいるんですよ。私を取り上げてくださった産婦人科の先生で、退院のとき記念のアルバムをくださって私の大切な宝物です」。私はためらわず「瀬戸先生でしよう。同級生で大の親友ですよ」と答えました。それから6年経ってこんどは妹の永ちゃんが入園してきました。母親の紀子さんは子ども在園中だけでなく、今もずっと力に

なつてくれています。

2. 私の義父（石川求助・初代狭山市長）は選挙を7回戦った人です。ある日突然「喜代雄さんは、選挙には一切かわらない方がいいよ」と言いました。

幼稚園をスタートさせる年でした。そしてこれが遺言でした。

この約束を破って唯一、街頭で選挙の応援演説をした人がいます。大野松茂という人です。人柄をとてども尊敬していたのです。大野さんは埼玉県議会議員を経て第3代の狭山市長、さらに衆議院議員になり、文部科学政務官や総務副大臣、内閣官房副長官を務め、いまは狭山市名誉市民です。

そして松茂さんのご長男典英さんの御奥様が、人吉高校第38期生の恵子さん（旧姓・加藤）。鬼木町の出身で、なんとそのお母様（淑子さん、旧姓・黒木）が瀬戸くんの御奥様（順子さん）と従姉妹同士です。

恵子さんの結婚式にはお招きいただきました。

3. 劇団前進座で光を放っている演出の十島英明くんは人吉高校の同期生です。彼の姪っ子の石塚由美子さん（旧姓・稲富）も人吉高校卒業生（第24期で、狭山市の住人です。二人のお子さんが当園の卒園生です。

人の出会いは、地球の人口分の一と言いますが、その奇妙さには驚いてしまいます。

出会い

瀬戸君に出会ったのは人吉東国民学校（今の東小のこと）の5年生か6年生になった頃です。1年生のとき太平洋戦争が始まり、5年生の



2015年、九段下のグランドホテルでの瀬戸君と私（左）

8月には終戦を迎えるのですが、4年、5年のころは、授業というより宮城遙拝、戦勝祈願の神社参拝、神武天皇から始まる歴代天皇名の暗唱、教育勅語の暗唱、それに軍服を着て軍刀を提げた先生の軍事教練がありました。軍人勅語も覚えしました。描く絵はほとんど戦争で勝つて進軍する兵隊さんや、敵の軍艦を攻撃する勇ましい飛行機の写真空想画ばかり、軍事一色でした。

東校の広い校庭は一面サツマイモ畑になり、私たちは先生の言いつけでモッコを持って、街に馬の糞を拾いに行きました。畑の肥料にするためです。糞は町中どこにでも落ちていました。家に帰っても防空壕掘りがあり、夜は灯火管制で消防団や愛国婦人会の見回りがありました。

切られたり。彼の口上はいつも「いざ堀部安べー参上ー！ 高田の馬場の決戦じゃー」。当時の私には堀部安兵衛とは何者で、なぜ高田馬場か、それはどこにあるのか分かりませんでした。今でも山手線でここを通過するたびに、瀬戸君と切り合いをしながら、馬乗りになったことを思い出します。

このころ瀬戸君の他に本武諒一、三牧都四郎、岸啓次郎君など新入生がありました。都会から疎開や転勤して来た人たちです。

中学校生活

1年生のときは今の西校に新設された「西陵中学校」に通いました。つい先まで山田川を挟んで「西校んびゃー」と言って冷やかしたり、罵

そのうちに高んばる（球磨郡相良村柳瀬）に飛行場ができて、敵機の機上掃射があつたり、高射砲も届かない上空を、B29爆撃機が悠々と通過するようになりました。避難訓練があり、いきなり空襲警報のサイレンが鳴りました。

5年生のときは地域ごとに小学生が集められて分散授業になりました。私たちは南願成寺町と新馬場の境の高台に立っているギリシャ正教会が教室でした。お堂の周辺はみなサツマイモ畑でした。椎葉という若い女の先生が一人で悪ガキどもを担任してくださいました。

終戦になって小学校の生活が再開するのですが、最初にやったのは教科書に墨を入れることでした。そんな中で担任の井上六郎先生がエク

声を浴びせていた人たちと仲良しになりました。8クラスで切磋琢磨しました。深野陸郎、吉田幹夫、白垣宏三、池田寅男、今村健次郎君らです。このころはスポンジボールが出回り、休み時間になると先を争って山なりのキャッチボールに興じました。瀬戸君は別のクラスでしたが、キャッチボールが始まるというの間に集団に入っていました。

皆さんは瀬戸君のことを「学力が優秀」だけと思っているかもしれませんが、やがて始まる野球も、習字や図画も何でもできて、いい成績をとる人でした。盛んに行われた書道展や図画展では入賞の常連でした。

2年になると、東校の一番北の校舎に移り、校名は西に対して「東

トール・アンリー・マロの『家なき子』を、何日もかけて表情たつぷりで朗読してくださいました。どうしてあの小説を選ばれたのか分かりませんが、「レミとピタリス爺さん」の語韻は、70年たつた今でも鮮明によみがえってきます。

瀬戸君はそんな中でいつの間にか同級生になっていました。人吉土着の人ではなく、言葉遣いや態度、白皙な容^{はくせき}貌も、どこことなく異質の人でした。都会で生まれ育ち、お父さんが検事で…というだけで人吉生まれの百姓の子には、近寄りがたい存在でした。

ところがいつの間にか肝胆相照らす親友になっていました。休み時間になると手筈や紙を丸めた刀を振り回してチャンバラごっこ、切ったり

陵中学校」になりました。生徒が一脚ずつ机と椅子を東校に運びました。

私にとっては学校までの距離が短くなるので大喜びでした。雨が降ってもこうもり傘はなく、紙の雨傘でそれも破れの目立つボロ傘です。何しろ妹たちが多かったので、傘は妹たちに回して雨が小降りになるのを見計らつて弟と二人「それ今だー！」と言って駆けました。そのころはまだ靴と靴下はなく、いつも裸足か手編みの草履。コッペパンはチケットの要る配給制でした。

さらに激動は続きます。理由は分かりませんが夏休みに入る前に、今度は北泉田町の旧制・人吉中学校（今の人吉高校）に引っ越して、間借りすることになりました。その時

は隣の川村から同級生たちがどつとやって来ました。学区制はなかったのでしょうか。加登住道、岩松孝、西徹也、川邊邦道君など、今の相良村から山を越え坂を下って通ったのですから剛の者ばかりです。小島宰君は山江村からでしたが、とても刺激を受けました。

瀬戸君の家には何回か遊びに行きました。二日町通りの病院の隣に格子戸があり、少し入ったところに「法律事務所」の看板がかかっていました(?)。

兄貴さんには何回か会いましたが、ついにお父さんと会話したことはありませんでした。いつもふくやかな笑顔のお母さんが出て来て、ガキどもの気持ちをそらさない対応をしてくださいました。

3年生になるとまた学校が替わりました。人吉高校の仮住まいから土手町の元高等女学校の校舎に移り、校名も「人吉市立第一中学校」と合併しました。8組には、瀬戸、村山芙美子(横枕)、浜田和子(塚本)、鳥越百合子君、前述の本武君や浦田繁喜君などが同じクラスで、愛甲晃生、福田忠彦君らは南中から来た俊才でした。担任は樫木了一先生で、休みの日には瀬戸君や昇満男君らと東間町のお家にしばしば遊びに行きました。

学校のトイレは全部女性用だったので、男子用が急造されました。講堂は狭く、職員室や体育館はありませんでした。コンクリート床の理

科室が職員室になり、体育館は荒板で二つに仕切られて私たちの教室になっていました。隣のクラスの授業や説教が筒抜けで、休み時間にはその説教の話題で盛り上がりました。それでも音楽室や裁縫室、理科準備室などが整い、2階建ての女子寄宿舎と炊事場がありました。何より教室や廊下はピカピカ、中庭は手入れが届いていました。

樫木先生は、清掃と整頓に厳しい方で、窓の外に紙くずやゴミが落ちていると、拾いに行つて窓から投げ返されました。今学校を経営する身になって、「清掃と片付け」がいかに大切なことか、先生の教えるを噛みしめています。

3年では修学旅行がありました。今は考えられませんが、同じ

組なのに二手に分かれて出かけました。一方は福岡・北九州方面、もう一方は阿蘇山でした。費用は半分くらいだったと思います。阿蘇組は栃木温泉に泊まって中岳の火口まで行き、草千里を眺めて帰ってくるコースです。瀬戸君とは相談しあつたわけではありませんが、私たちは阿蘇組でした。

彼はいつも弱い方の立場に立つ人でした。クラスに肢体不自由の人や、今でいう発達障がいの人がいいたのですが、彼はだれに対しても分け隔てなく、常にやさしく振る舞い、決して無碍にする人ではありませんでした。家庭の収入はおろか能力や性格で人を差別したり、偏見を持つ人ではありませんでした。いつも人には敬意をもって接し、みずか

らはほんとうに謙虚でした。「人は自分の周りに多くの壁を造りたがるが、橋を架けようとはしない」というニュートンの言葉や、「本当に自由な心とは、相手を認めることである」というゲーテの言葉は、本質において瀬戸君には、無関係でした。

人吉高校生活とその後①

人数が少なかつたせいから入学試験はなく、面接だけで入学しました。3年次には加登住、小島、白垣、深野、三原、吉田、山田君ら、女子では村山、遠近緑、木村憲子、淵田祥子、星子百合香、恒村律子、山本妙子、後藤準子君などが同クラスで、秀才がそろっていました。このクラスから東大、京大、九大や熊大、麻布畜産大、奈良女子大、

東京理科大、早慶など名門といわれる大学に複数進みました。

後に人吉二中の校長になられる海老原亮吉先生が担任でした。先生は英語の授業はさることながら、ホームルームの卓話はいつも庄巻でした。私はみずからノートを作つて内容をメモしていたのですが、ある日先生に見つかり、その後呼び出されたとき、早稲田の2部に入るようしきりに勧めてくださいました。家が貧しく授業料が滞つたり、苦労しているのを知つておられたのです。そういえば上村正敏校長には何回も授業料を肩代わりしていたきました。

卒業の直前に父親が寝込みました。海老原先生はその枕元で「喜代雄君を大学に出してください。下

宿は杉並区のH薬局にお願いしましたから」と勧めてくださいました。

父は卒業前に亡くなり、大学どころではなくなりました。先生は教える子のために親身になって走り回っていただくたのです。そのころ8番目に生まれた妹(6女)に「亮子」と名前を付けました。

⑤に続く

【ひがし・きよお／人吉市願成寺町出身
人吉高校5回生、現在・埼玉県狭山市
在住、学校法人石川学園理事長。元国立音楽大学音楽学部教育音楽学科、元大妻女子大学家政学部児童学科講師】

※瀬戸致行さんについては45号12頁参照のこと。

くまがわ春秋歌壇

いもこ短歌会

裁判に出頭しない佐川某 逃げるが勝ちアベの直伝
亡き夫の無念を晴らす裁判に決然と起つ赤木雅子は

柳原 三男

球磨川の清き流れが牙を剥き平和な日常呑み込みてゆく
胸川の濁流狂いし数日後そしらぬ顔して清流となる

坂本 ケイ

ゆたかなるわが球磨川は無慈悲にも家呑み街呑み人も呑みゆく
汗だくで車椅子押す夫と二人手つなぎ眺む口之津の海

上田 廸子

行政の怠慢なりとひとり吼え市街地呑み込む画面に見入る
ダムによらぬ治水工事は遅々として進まぬままに濁流襲う

上田 精一

砂時計

— 思い出るままに — ①7

小野武己

「Ⅳ」 母のこと

⑪ 卒業式 ①

「指ば、切つてしもうたあ」

「えっ、切ったあ?」

「どれどれ、見せてごらん…うん、ああ良かったあ。傷

は小さい、大丈夫、大丈夫よ」

母は僕の手を掴み、すぐさま切った指を口にくわえる。

「唾は消毒になるとよ。じつとしとき、心配いらんからね」

傷ついた手を母に任せる。その痛さはやがて薄れてしまい、母の温もりが指先を通して身体全体に痺れるような感覚となって広がっていった。やがて僕の指を口から離

し、傷口を見て、ほら、もう血は止まったよ、と言いな

がら割烹着のポケットから端布(はぎれ)を取り出し歯にくわえ、丁度の大きさにビリッと裂くと、僕の指にキリッキリッと巻きつけた。

「お母さん、あんまし強かがねえ。指の痛かがあ」

「少し強めにせんと、血が止まらんけんが…ばつてん良かったねえ」

「指のちよんぎれんで…よかった。これはお母さんの責任たいね」

時々母にも佐世保弁がでてる。

「じゃあ、あとはお母さんがしよつかね」とかまどに火を点ける。

「よか、もう痛うなかけん、俺いがすつけん。急ぎの仕立物のあつとやろ。手の汚れるたいね」

団扇バタバタ、火吹き竹フーフー、煙が目染みて、僕はポロポロと涙を流す。

かまどはメラメラと火を吹きだす。ナタで薪を割ってかまどにくべる。段々と火力を増してくる。やがてクツクツとお米のたぎるかすかな音と共に吹出す湯気にさつ

ま芋のほのかな匂いが漂ってくる。もう煙たくは無いのに、母親の愛情を思い出して、再び僕の眼にジワッと熱いものが溢れ、そっと人差し指で拭い口にくわえる。さつま芋の匂いに刺激され口に溢れてきた唾液に混じって、それはむしろ甘く感じられた。

「タアちゃん、どがんとしたとお？」

食欲をそそる匂いに誘われて来たのだろう、いつのまにか妹と弟が僕の右と左にしゃがんでいて、僕の顔を覗き込んでいたのであった。

「ばかあ、うんにゃ、なんでんなか、煙たかだいたいね」僕はさりげなく誤魔化する。

「もうすぐ出来るけんが、マコちゃん、かまどのオキは消し壺に入れんね」

妹は長火箸を不器用に使いながら「アチチッ」と言いつつ作業をこなしている。「消し炭」は少しの紙で火がつくので七輪に炭火を熾す時に便利なのである。

妹、弟と腹いっぱい、さつま芋ご飯を堪能した。おかずはヒジキと厚揚げの煮つけ、そして鯨肉のステーキと豪華版であった。今日は僕は買い物を言いつかってなかつ

んばい（沢山）貰っちゃるぞ』って。

小学校の二年生で佐世保に引越して来たのだが、勿論給食は無く、持参の弁当と進駐軍の脱脂粉乳がいわば給食替わりであった。ある子は竹の皮や葉らんにお握りを包み、ある子は兵隊さんのドカ弁にご飯とタクアンやメザシを入れて持参していた。百姓さんの子が多かったで、ご飯はギンシャリであった。

僕の弁当箱は何故か柳行李だった。外米に麦、例によってさつま芋ご飯であった。柳行李の弁当箱は軽いし保温性も良いし意外と良い弁当箱であったのだが、子供の僕は昼時になると、ちよつとばかり辛かった。というのもその後、花柄のついた弁当箱、鉄腕アトムの弁当箱をクラスの殆どが持つてくるようになったのだ。だから僕も同じものが欲しくてたまらなかつたのだが、相変わらず柳行李のままであった。皆の視線を感じてしまい、左腕で抱え込むようにして弁当を済ませたものだった。

「何んや、お前の弁当箱は、洋服入れのごったつい」

ガキ大将が冷やかす。

「バカ言っな、こいは弁当箱ばい」

たので、昼前にでも母が町に行つたのだろう。当時は我が家では豚肉や牛肉は誕生日と大晦日のすき焼き鍋以外、口にすることは無く、手頃に買えた鯨肉ばかりであった。

指を怪我した僕は茶碗洗いから解放され、代わりに妹が踏み台に乗って、横で僕があんまし水を使い過ぎるなよ、なんてうるさく言うからだろう、何やらブツブツ言いながら洗っている。

卒業式当日、厳粛に式は進んでいった。

送辞、答辞も終わった。そして、表彰式が始まり、校長先生から記念品が渡される。

僕はぐいっと首を伸ばして目を輝かせて一つ一つ確認する。

……やつ、国語辞書は、貰うとるたい

……おつ、あの先輩、目覚まし時計ばい

……やややつ、アルマイトの弁当箱たい、良かなあ

僕は卒業生が次々と色々な賞品を貰っているのを見て、しっかりと心に誓った。『よし、俺いも卒業の時はず

腕で抱え込んだまま応酬する。

「やーい、やーい、洋服箱お…」

ガキ大将は追い打ちを掛ける。

「ちきしょう、そがんこと言うなら、勉強で…、勉強でこい」

僕にとつては精一杯の反発である。何時もだが、「勉強でこい、勉強で…」と言うと、何故か、ガキ大将は引き下がってしまうのだった。

かくして、一年が過ぎた。そして、僕の卒業式となった。僕は両手一杯の賞品を貰った。

喜び一杯、県知事賞が国語辞書。市長賞がアルバム。学校長賞がセルロイドの筆箱。PTA会長賞が目覚まし時計であった。

だが、この年から完全給食になり、かつこいアルマイトの弁当箱はなかつたのである

（つづく）

【おの・たけみ／小児科医院院長、宮崎市大塚町】

倉敷便り

42

絵と文／原田 正史

修験道本山「熊野神社」

令和2年5月17日、帯高にほど近い倉敷市林の修験道本山熊野神社



修験道総本山「熊野神社本殿」
倉敷市林 (20.5.17)

社を訪れました。林の集落を抜けると、その東側の新緑の樹木が生い茂る山裾に、丘陵状の低い山地が広がり、その麓に社殿があります。花崗岩造りの大きな鳥居をくぐると、同じく花崗岩造りの敷石が並べられた緩やかな参道が続きます。

この神社の社伝によると、大宝元年（701）に紀州熊野本宮を勧請したとされています。神社の本殿は5棟の神殿で構成されており、中央にある第2殿が国重文であり、明応元年（1492）に再建されたものです。この神社の創建当時の建物は、その後の火災によって全て

焼失してしまっています。ところがこの火災を裏付ける証拠が敷石の中に残されていました。火災に際して、強烈な熱気を受けた敷石の殆どが焼き割れてしまい、使いものにならない状態になったようです。現在だったら恐らく総替えとなったでしょうが、物を大事にした当時の人たちは焼き割れていても今後使用出来るところはないかと、入念に探したものだと思われます。そしてその結果、約1mほどの敷石が焼き割れながらも今後の使用に耐えられると判断され、残されたのです。

参道横には、神社に関するいろいろな説明が書かれている立て札が一行に並べられています。したがって焼き落ちた大火災を示す唯一の証拠である敷石のことを書いた、特大の立

て札が必要であると思われます。

参道を登りきると、頂上に斜面の一部が横長に切り込まれ、平坦地

が造成されていて、ここに第1棟から第6棟に及ぶ長い本殿が鎮座します。通常の神社の本殿とは全く異なる形態です。

なる形態です。

日本各地に存在する修験道の本山といえば紀州、すなわち和歌山県熊野の

総本山をはじめ、背後に峻しい険阻な山地を持つ所に鎮座されています。ところがこの倉敷市林の熊野神社は山とは言え、丘のような麓から頂上が見えるの低い場所にあるのです。修験道にとつて必要な修行の場である断崖絶壁など、いくら探してもある筈がないのです。ですから、この熊野神社は初心者

の修験道本山だったのかも知れませんが、あるいは病氣や怪我をした山伏たちが、快復を目指す場所だったのかも知れません。いずれにしても、優しい修験道本山だったことは確かだと思われます。

なお熊野神社には本殿以外にも、広い敷地に数多くの社殿が存在しています。中でも左右に社殿を従えた総高21・5mに達する文政3年（1820）建立の三重塔は、周辺に広がる樹林の緑に映えて実に見事な景観を醸成しており、一見に値するものだと言えるでしょう。

○山伏の歩きし道や若葉雨

三重塔は文政3年（1820）建立。総高21.5m（県重文）

熊野神社は初心者

【はらだ・まさふみ／日本地質学会会員、倉敷市】

450年
念し
誕生
記書
き下ろし

小説・相良清兵衛

31

山口啓二

ここ数年、相良軍は島津義久を総大将とする薩摩軍に就き、隈庄城、堅志田城、高森城を陥落させ先君義陽公の敵討ちを果たし、その後は豊後大友攻めに加わり、いずれの戦いでも常に先陣を切つて大活躍をしていたが、関白秀吉が二十万を超える軍勢を府内大分に出兵させた頃から島津軍は劣勢となつていった。

天正二五（一五八七）年の二月には大将羽柴秀長が豊後に入った。薩摩軍はこれにより退却の一途を強いられることとなり、相良軍も勿論その中にいて、今度はそのしんがりを務めていた。

『このまま薩摩軍に加勢しては我ら相良も秀吉軍に滅ぼされるかもしれぬ』

犬童休矣はそう思わずにはいられなかった。

この頃軍七の父犬童休矣は薩将伊集院宗親とともに豊後萱坂城にいたが、これまた秀吉に寝返つた大友勢・志賀親次らに攻められ、阿蘇の坂梨城に撤退を余儀なくされた。大

【前回までのあらすじ】「流罪」という裁きを受けた清兵衛は、弘前藩津軽家へお預けの身となつてた。弘前藩主・信義公は昔話をしきりに聞いてきて、五十年以上も前の朝鮮出陣の話や島津軍との争いの話にも及んでいた。

友の軍勢は羽柴秀長を大将とする援軍が西国各地の武将と共に豊後入りを果たしたと聞き奮闘、その勢いが増して薩摩軍を追い詰めていく。坂梨城を大友軍に囲まれたところを今度は薩摩軍・新納忠元と伊集院忠親がこれを攻撃し、休矣はなんとか城を脱出。その際に数か所を負傷しながらも敵と大いに戦い、その後ようやく球磨にたどり着いた。その折に休矣をかばつた稲留一彌太が討ち死にした。すでに筑紫から八代に陣をひいていた島津義久も自領へと退いた。

しかしながら島津義久は相良の忠臣を見定めるがごとく、数えで十四歳になつたばかりの主君相良頼房公を日向延岡に出陣させるよう、筆頭家老深水宗芳に命令して来た。これにより公の母台芳尼と祖母了心尼、それに宗芳に休矣、軍

七らが御館の広間に集まり頼房公と話し合う事となった。

「なんと、殿自ら兵を率いて日向に向き、参戦せよとの命にございまするか」

休矣は思わず驚いて声を荒げた。

「御意。さすがは義久殿じゃ、我らが裏切らんとする前に先手を打つてきおつた。が、いま義久公に逆らえば相良はすぐにでも潰される。かと言つて、このまま薩摩に就いておれば関白殿の敵とみなされ攻撃を受けるかもしれぬ。さて、如何したものよのう」

「御家老、いまだ島津は肥後のあちらこちらに陣取つてございます。あとしばらくは島津に逆らうわけには参らぬのでは。とは言え関白殿下のご機嫌も伺わぬといけませんぬし」

「そうじゃなあ休矣殿、ここはいま一度島津殿に協力するよう見せかけるしか仕方ないか。そのうちに島津は関白殿の軍門に下る事は目に見えておるゆえ、その間に関白殿下に相良の安堵をお願いする

しかあるまい」

流石の宗芳もほかにいい案が無かつた。ここで軍七が平伏していた身体を起こし声を上げた。

「いかがでござりましょう。父上と軍七が殿にお仕えして日向に向かい、御家老様は長誠君とここ人吉に残られ、関白殿下が八代へ御到着のころを見計らつて若君と共に殿下にお目見えなされる、という策は。もし殿下が豊後から来られるとなれば殿と我らが共にお目通りいたす事とすれば」

「おう、それはなかなかいい考えじゃ。なあに、そのうちに島津とは縁を切らねばならぬのです。かと言つて時期を見謝れば関白殿下のご機嫌を損ねましょう。殿、如何なされますや」

母台芳尼は中央に座つた頼房公の横で、まだ幼さが残る我が子の顔を見入つて言った。

「宗芳、休矣、それに軍七、あい判つた。その案で進めようぞ。軍七、これからも余を色々と手助けしてくれよ。それにしても摂津介が生きておつたということも無かつたのだろうか」

「殿、ありがたきお言葉、亡き摂津介も生前この相良家を終世お守りするのは軍七しか居ないと申しておりましたのですが、残念無念、高森での戦いでああいふことになりました

■主な登場人物

相良清兵衛（軍七・頼兄）＝相良家 家老
相良頼房（長每）＝相良家 第20代当主
犬童休矣＝相良氏の家臣
深水宗芳＝相良氏の家老

ございます。かくなる上は休矣殿の申す通り島津・関白両方の機嫌を損なわぬよう努めなければなりません。殿には申し訳ござりませぬが、休矣殿と軍七と日向にお付き合いたたく事とあいなるかと」

歴戦の雄、深水宗芳もほかに策が無いと悟った。一同その案に頷いた。

「了、心尼様も承知いただけるのですね。この窮地を救えるのは宗芳と休矣、それに軍七しかほかにおりませぬ」

「はい台芳尼殿、仰せの通りでございますようや。殿を、そしてこの相良家を護る為なら仕方ありませんかと」

若き領主は幾度もの試練を生き抜いて来た家老らの意見に従うほかなかった。

「承知した。宗芳、休矣、それに軍七、今後の事はよしなに頼むぞ」

「ははっ」

三人は頭を擦りつけるが如くひれ伏した。

日向では羽柴秀長らの軍勢に押され島津義弘、家久はかなり苦戦を強いられていた。秀長は義久に再三和睦を進めたが島津はこれを聞き入れなかった。十四歳になったばかりの相良頼房率いる相良軍は湯前から米良を越え日向に入り、休矣を先頭に通り返した島津軍のしんがりを務めて、島津

ですなあ。徳川様の時代になって、まあ藩の内紛はここ弘前だけではなくいずれにもあったようじゃが、戦いの無い天下泰平の世の中になって実によくござった」

信義公は城から届いた料理を食し、供の者に持たせた酒を飲みながら話し始めた。

「左様でございますよ。ああ、そう言えば美濃の大垣城で三成殿にお味方した折、お父上信牧公のぶかつらのご家中で服部なにかしと申される方が、我らに徳川様への寝返りを進言されたお方が居られましたのう。四十年ばかり前のことですが」

「おお、その人物は我が父上の家臣服部長門康成にござる。長く奉行を務め申した」

「ほう、そうでござりましたか。で、その御仁ごじん、まだ御存命にござりまするか」

「いや、服部康成はすでに亡くなったが、その嫡男服部播磨康義は当藩の剣道指南役にござる。本然殿には是非とも康義にお会いいただきたい」

「ほう、左様でございまするか。是非一度お目にかかりたく存じますなあ。あの折には我ら相良は既に秋月、高橋殿と共に徳川様へ御忠臣致す所存であったが、あの助言があつたゆえ我ら結束して大垣城を落とせたのでござった。津軽勢が城の外から援軍を送り込まれ、本丸攻撃にも加勢され申

家の祖の地都城まで移動する事となった。

その頃関白秀吉は九州に渡り、筑紫の各地を平定、肥後に入り八代に向かつていた。その際に島津に加担したとして筑後・秋月家を取り潰すつもりであったが、城主秋月種実あきづきたねざねが茶道具の名品『檜柴の肩衝かたさき』を献上したため、筑後の三十六万石から日向高鍋あたりの飛び地三万石余に領地替えさせられなんとか生き延びた。この茶入れは室町幕府八代將軍足利義政の所有品だったものが死後持ち主が転々、織田信長も所望したが叶わず、遂には博多の豪商の持ち物となり、その後筑前で勢力を伸ばした秋月種実たねざねに渡っていた。『天下三肩衝』と呼ばれた茶器である。たつた一つの茶入れが命を救い、狭いながらも領地を安堵されたのだった。この高鍋秋月家こそが、のちに相良頼房公の奥方となる『いく』殿の里であった。

この頃にはついに島津義久は関白秀吉との和睦を申し出、伊集院忠棟が羽柴秀長と講和を始めていた。このあと関白秀吉は八代で深水宗芳らと面談することとなる。

「太閤秀吉殿の天下統一で御座るか。五十年以上も前のことよ。更には『唐攻め』、それにやはり『関ヶ原』ですなあ。あの戦乱の世にあつて相良殿もいろいろ苦勞をなされたの

した。そのおかげで我が相良家もこうして生き残る事が出来たのでござりまする。もう四十年も前のことですのう」

「成程、その頃から津軽と相良は繋がりがあつたということか。誠に奇遇でござるな。ときに本然殿、ぜひとも本音を聞きしたいのじゃが、そなた主君に訴えられた様々な罪状、あれは誠にござるか」

「殿、その辺りは數の中にしとうござりまする。拙僧は陰ながらキリスト教をいまだに信じてござるが、これが一番の根源かと。神君家康公が恐れられたのも切支丹でありますゆえ、やはりあの時代に異教を信じた拙僧の間違いではなかったかと今では少々後悔はござりまする。ただ、鎌倉の世から続いた相良家を、我らの代で潰すわけにはいかなかった、そう言うことにござりまする。主君を守る為ならこの本然、いつも命懸けにござりまするよ」

「仰せのとおり。しかし薬のこと易学や儒教のこと、医術や戦術のこと、全てにおいて本然殿にかなうものはここ弘前には誰一人居りませぬ。さて、その知恵はどこから授かれたものやら」

(つづく)

【やまぐち・けいじ／人吉市】

字図で見る球磨の地名 ④ 上村重次

里坊 (サトボヲ)

— 多良木町、水上村 —

多良木町黒肥地字里坊と水上村岩野字下里坊 (シモサトボヲ)、字上里坊 (カミサトボヲ) はムラ境を挟んで隣接している小字である。この地名が境界標の勝示に由来するか否かは判断に苦しむところである。

芭蕉の「続猿蓑集」(元禄十一年—支考撰とも云われる) に、

里坊に確聞くや梅の花

という句がある。里坊とは山寺の僧などが人里に構えた住家で、近江国比叡山僧の里坊は京都二条猪隈にあったことが記されている (以上『大言海』)。

猫寺の異名で知られる千光山生善院 (新義真言宗) は水上村岩野字下里坊にある。この寺の前身・普門寺は市房神社の宮寺別当坊として創建されたもので、いわゆる里坊である。従つて里坊という字名は別当坊があったことにちなむ地名とすれば問題はなさそうである。

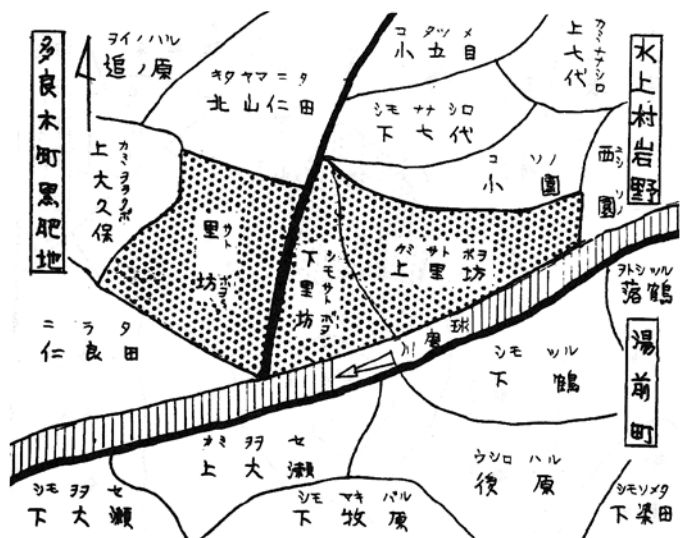
ところが地名の里坊が先か、別当坊建立が先か、突き詰めて検討すると幾つかの疑問点が浮かび上がってくる。

大同二年 (807) 創建の市房山神社の遙拝所が湯前町に開設されたのは慶長五年 (1600) であるが、明治十六年に火災で焼け、再建されたのは昭和七年で、以来市房神社里宮として尊崇されてきた。一方、市

【おこわり】本連載は平成6年から9年にかけて執筆されたものの復刻版で、合併前の町村名をそのまま使用しています。

房山神社別当寺は山麓の湯山にあったのを永正の初め (1505ごろ)、岩野生善院の東側に移し施無畏山真言院普門寺と称したが、いわゆる猫寺事件があつて慶長九年 (1604) に湯前町の市房神社里宮の隣地に移し、明治維新後に生善院に集寺された。生善院は普門寺五世盛誉と生母の供養のために寛永二年 (1625) に建立された寺である (以上『九州相良の寺院資料』)。

以上が市房山神社別当寺としての里坊 (普門寺↓生善院) の歴史であるが、疑問の第一点は、市房山神社別当寺の里坊が市房山麓から遠く離れた黒肥地境に移された理由が明ら



かでないこと。歴史的には里坊 (普門寺) の移転が先で里宮 (湯前市房社) が後という点も気になる。湯前の里宮が地名化していないのに、岩

野の里坊は字名になっており、しかも隣接の黒肥地村域にまで字里坊が広がっているのは理解しがたいことである。

地名にこだわって解釈すれば、岩野と黒肥地のムラ界には勝示があつて、山の勝示が山伏に変わるのと同じく、里勝示が里坊の字名になり、地名の由縁でこの地にある寺 (普門寺↓生善院) が「里坊」と俗称されるようになったと考えられる。また、生善院にまつわる化け猫伝承の真相は、境界表現の「根子」に由来する地名説話かもしれない。このことは今回の猫地名で検討しよう。

【うえむら・しげじ／宇土市生まれ、元熊本日日新聞社記者】

球磨川の駅・ものがたり

＝肥前線 (川橋) とくま川鉄道の各駅探訪＝

熊本産業遺産研究会 松本晋一

31連載に
駅が二冊に

■A5 判 212 頁オールカラー

■定価 1,650 円 (税込)

ご購入は人吉・球磨の書店、TSUTAYA 八代松江店、博多駅売店、くま川鉄道「くまたび」、道の駅さかもと、発行元の人吉中央出版社にどうぞ。

発行：人吉中央出版社 0966-23-3759

83 くまがわ春秋 Vol.52+53 2020.8.20

くまがわ春秋 Vol.52+53 2020.8.20 82

愚感随想④―教師力と絆、そして縁

富永和信

「縁」という言葉があり、古くより「良縁・悪縁」などと、何かにつけて使われているが、実に深い意味を持つ不思議な言葉である。

何が不思議かというところ、理屈では説明できない目に見えない糸によつて、ある事象と別の事象とが時空を越えて連鎖し、繋がるからである。

この「縁」も言われぬ神秘性を「縁」として何とか説明してきたのである。うが、私には理解不能である。「縁なき衆生は度し難し」「袖振り合うも他生の縁」、さらに「一樹の陰」「一

河の流れ」の縁など頭を悩ます。「他生」とは前世・現世・来世の因果のつながりと説く。

私は昨年、本誌44号に『吉田松陰の心』が繋ぐ長州と肥後相良』を投稿した。話は「松陰の精神」に心酔され、ライフワークとされた元・人吉第一中学校校長の吉澤典雄先生についてであった。

この投稿文によつて私の思いもよらない「縁」なるものと「教育の力」を感動しつつ実感した。

現在、私が所属している吉田松

陰関係の公益法人「松風会」の昭和63年9月発行の会報「松門」の中に前述の吉澤先生の投稿文「松陰の心を求めて」があった。

私はこの30数年前の投稿文を、平成を飛び越え令和元年の秋に偶然、目にしたのである。この古い会報誌の一綴りがどうして私の手許にあるのか思い出せない。さらに雑多な資料を整理する中で、先生の投稿文を目にすると、は、「不思議な縁」のなせるわざとしか思えない。私が吉澤先生の名を知ったのは、その投稿文であった。

先生と吉田松陰との関わりや、その業績などは本誌44号の拙稿に詳しいので省かせていただくが、吉澤先生は私が松風会に関わる以前から、この会と深く交流されていた

のであった。

私が本誌に、この吉澤先生の事績について投稿してすぐに、人吉高校同期で友人のS・K君から電話があり、『春秋』にある吉澤先生は、僕が人吉二中3年B組の時の担任の先生で、大変お世話になった。僕にとっては父親代わりの大切な先生。卒業後も先生を囲む『未耕の会』を設けて、先生が亡くなられるまで人吉在のI・H君の世話で開いていた。今でも人吉に帰った時は、奥さんへの挨拶と佛さんを拝んでいる。君から奥さんに『春秋』を、記念に届けてくれんか』とあり、当時の名簿を送ってくれた。

前後して「未耕の会」代表世話人である人吉在のI・H君からも手紙がきて、「厳しかったが優しく

包み込む素晴らしい先生」など、その他詳しいことを教えてくれた。

人吉高校同期で北九州市在のU・Kさんからも、「人間迷う時あれば松陰先生のもとへと教えられ、その後の人生の支えになった。人吉に帰った時は、佛さんと横座の松陰像を拝んでいる。先生亡き後は女子生徒有志で、奥様を囲む会を開いている」との手紙を頂戴した。

また人高同期の友人で熊本市在のN・K君、M・R君たちから電話で、いずれも先生への敬慕の念を伝えてくれた。

さらに先生の教え子ではないが、人高同期で錦町木上在のS・Sさんからの手紙で、「吉澤先生は私と同じ木上出身で、吉澤家に養子にいかれた。お兄さんも木上中学校

長を務められ、教育一家で知られている」と教えて頂いた。

私はS・K君から頼まれた「くまがわ春秋」を吉澤夫人に、事情説明付きの手紙を添えて届けたところ、折り返し返礼を頂戴した。

『くまがわ春秋』有難く拝受。早速、佛前に、『山口にも、もう一人あなたの仲間が出来ましたよ』と供しました。亡き主人も何よりも喜んでのことでしょう』とあった。

私は正直言つて、この返礼には感動した。何故なら、この先生にして同夫人あり、そしてそれに応えた教え子たちの三位一体の絆を見たからである。

皆さんからいただいた話から、吉澤先生は学習と規律の面では相当厳しかったが、それに余りある優し

い包容力と指導があった。それで終
生忘れ得ぬ恩師となり、先生を囲む
「未耕の会」が先生が亡くなるまで
続き、その後も個人的な絆を保ち
続けたのである。

この「師弟一如の絆」こそ、吉澤
教育の力ではないか。この教育の原
点は先生が心酔された「吉田松陰
の精神」の心、つまり厳格・誠実・
温かい包容力そのもののような気が
してならない。

教育は無機質の財貨物をつくるの
とは次元の違う「人間を育てる」と
いう、他の職業とは根本的に異なる、
限りなく聖職に近いものではないか
と改めて認識することとなった。

翻つて私も数ある学舎のなかで特
にお世話になり、忘れ難い恩師も
あったがいずれも鬼籍にあり、これ

までに報恩感謝の実行をしてもら
ず、我が身の不誠実を恥じて反省し
ているが、今となつてはもう遅い。
嗚呼。

一方、今回のこの一連の出来事を
通して私は不思議な「縁」というも
のを実感した。

まずは人吉球磨出身で山口在の
私が、今から30数年前の吉澤先生
の投稿文「松陰の心を求めて」を
偶然に見つけたこと。また、それ
を基にした文を本誌に発表したこ
と。さらに、たまさかそれを読んだ
当時の人吉二中の幾人かが人吉高
校で私と同期で、友人であつたこと、
などいろいろな偶然が重なり合った
のである。私の全く知らなかつた吉
澤先生の姿を、本誌を通してクロー
ズアップ出来たのである。

つまりそれぞれが、小さな「粒の
糸」であつたものが本誌を媒体とし
て、大きな先生の大きな糸を中心
に、古くて新しい「糸」となつて時
空を越えて蘇つたのではないだろう
かと思つたのである。

これが古くから言われている「縁」
というものであろうと、勝手に納得
しているのである。

【とみなが・かずのぶ／山口市】

鶴鴿短歌会

六月詠草

夫が身に持仏のように懷に般若經典わたしの宝
目に青葉耳にうぐいす聞きながら古城の小路散步楽しむ

釜田 操

伏せながら歌を詠もうと指を折るいつしかまどろみ夢の中へと
夕方の好きな番組見ていたらチャンネル変えて子はすまし顔

三原 光代

テレビにて「歴史探究」見ていると史観の変化に感慨深む
コロナにも負けないように心がけ食と運動暮らしの中に

中原 康子

硫黄山マグマ活動続く中えびのは華麗にミヤマキリシマ
球磨川の鮎の跳ね飛ぶ浅瀬には朝餉狙いかゴイサギ佇ちて

橋詰 了一

時ならぬ長き休みに子ども等は友も誘えず誘はれもせず
「爺じ元氣」スマホに映る孫の顔移ろう時代の朝のふれあい

守永 和久

歳経れど夢に出て来る貴女はなお乙女の如く甘く香りぬ
君想い眠れぬ夜のなぐさめはラジオが流す深夜便の唄

河内 徹夫

厨房に立てばふつと蘇る十歳で亡くした母のだご汁
「せんせい」と初めて子等に呼ばれしに恥ずかしかつた二十歳の私

中村美喜子

給付受け地域に活かす配慮にて書店に駆けつけ意中の図書を
吾が身には「青い山脈」衝撃が高校進学悩み悩みて

西 武喜

天草の初任の妻の写真集写りし姿まだ学生風が
吾が初任 校舎は海のすぐ近く幼き子らがぶかぶか海に

堀田 英雄

方言を味わう ④6

球磨弁の接頭・接尾語 ⑥

— 七月 —



前田一洋

はげ

七月二日の暦を見れば「半夏生」とある。七十二候の一つで「夏至」から十日目ごろ、球磨・人吉地方では「ハゲ」と言つて、田植えも終わり一息つく小さな祭り日。麦を煎つて臼で挽いたハツタイの粉や、餡こをつめないハゲだごを作つて神前にお供へしてきた。

「宿題の了えてからでよかて向かいのおばさん方や、はげだこのでけたばいちゅうて、ちよこと持つて行たてくれんや。おばさんなハツタイの粉も

ふーきやん好きじやつで、袋にえろう入れてえーたばいて言うてくれい。そいどん今年のだごは、ちつと太と過ぎたておばさんのヒツたまがつなつかもしれんね」

「ただ今、おばさん方や行たて来たばい。こらアあごタンのヒツばずれはせんどかちゅうて、ふーきやん喜びないたばい。褒美にちゅうて遣や錢ば呉れないたと。帳面買うで」

「そのよに喜うでもろつるか、おまいがお陰だんだーん。帳面でん鉛筆でん買いない」

たなばた

元々は盆行事の一環で「棚幡」と書くべきところかも。地獄の釜の蓋がパクワーンと開けられ、ご先祖達は遙か一万由旬(約10000km)の彼方からチャーターしたシヨウロトンボで里帰り。丸々一年ぶりのご帰還だ。

それをお迎えするため、「遠かといば、いきやだれ(疲れ)クリヤなんしつろ」と、庭先に木や竹でご接待用の棚をこしらえる。そして西瓜や瓜、なすびや胡瓜などの新鮮な野菜や果物、さらに盆だご等をお供へする。

また、中にはあの世でも認知症が治らなかつたり、ワザと良かおなごの居る家に行こうとなさる亡者様も。それでは「世間体」もよろしくないで、「ほらほら、おまいさん方はそっちじゃなか、こつちたいこつち」と、

旧姓やら戒名などを書いた幡をウツ立てた。

その両方を合わせると、まさしく「棚幡」じゃありませんか。今の七夕飾りに短冊や果物の絵を吊すのも、その名残なのでしょう。

水天宮さん

例年は今ごろになると、どこかで夏祭りがあつている。多子塔さん、若宮さん、聖徳太子、水天宮などと。

そしてその「打ち上げ」の「六月籠」が青井さん。それぞれに伝統的な催しや、お守りなどが用意されており、水天宮のは小さなヒヨウタンである。

これを首に掛けていると、水にウンぶくれたり、ガラッパからジゴをスン抜かれんやという有り難い品。

「昔むかし大王さんの淵イ、ふーきやむのうてーらん事ばかりキツする

ガワツパがおつたげなたい。馬やら子供の足よば引いて、ウンぶくらきやたり、ジゴンスウから手さしくうだりしてたい。そのガワツパゲドば庄屋さんのヒツ捕まえて、柿の木いつけておきないたげな。そしたいばびんたの皿ん水のなかめしなつて、助けてくだーいちゅうて泣くげな。そしたでヒヨウタンば三つ持たせて、これをば一そとめ川ん底に沈めてしまえば許すちいないたげな、どぎやなつれろたい」

へこ

男の水泳パンツや女子の水着などなかつた頃、男は手拭いに紐を付けたようなモッコベコ、見たばかりでムシャムシャ良か赤色の六尺ふんどし。女ごは体操の時間に着るちようちんブルマや、寝巻兼用のシミズで泳いでいた。

女子の場合は水際で、両手両足を

同時にドボンと前後するだけの「おなご泳ぎ」であり、向こう岸まで行くことはめつたにない。

しかし男はかなり厳しい修練が。川底に手の届く所で水浴びをするのは「ふらチン」組で、やがてへこをするようになると石垣や橋の上からの飛び込みが待っている。更に赤べこの六尺ふんどしを締める上級生には、赤濁りのした濁流をセキ渡る度量と力が試された。

その赤べこであるが、反物屋から買つてくるのではない。なんと葬式の時に使われる五色の幡(旗)、その中の赤色のを夜陰に乗じて墓ワラから持つて八チ来るのだ。そうすれば河童も寄り付かず洪水の時もへつちやら。

【まえだ・かずひろ／人吉市】

球磨弁の接頭・接尾語⑦

— 八月 —

前田一洋

金太郎さん

「あんじゅら見てんない、大畑へん
の山やナマ太とか久蔵雲のいきやうつ
たつたがな。いんまゴロゴロさんの来
て、はだかでおる子がへソよばオッ取っ
てハッてきなつとじやつで。ほらほら
早よ、こきイ来て金太郎さんよばし
とらんばちゅ」

「でーして、おらせん」

「田ん中のビックンどもよば見てん
ない、一匹だりポンポンにへソのあつ
とはおらんどがな。あぎやして田ん
中で、はだきや水浴びりばかりしとつ

たで、ゴロゴロさんからへソよばオッ
とられてしもたとばい」「うーそ」

「どいウソじやろきや」「そんないば、
ビックンからオッ取んないたへソはど
けあつとな」「知れたこと、シシメぎやー
(蜆貝) やらツクシぎやー(あさり貝)
の貝殻に入れてあつとたい。貝の中身
よば見てんない、どいもこいもへソば
かいじやろがな。いつそとめはだかの
子どもやらビックンからゴロゴロさん
の取つやげて、あの中や入れとんなつ
と」

水浴びり

「母ちゃん、向かいのヨツちゃん共
と水浴びつきや行たてきてよかな」「よ
かいどん、行く前にやお仏飯ば頂アて
から行きなないよ」「なしゆな」「なしゆ
うちゅうがあるきや、ガラッパからジ
ゴ(腹わた) よばスン抜かれんごと
たい」「ガラッパは、本当からおつとな」
「おらじやコテ、淵ん底やらゴソやば
の陰っピラから、子供よば見といさ
みや、お仏飯頂アとらん子よば見付
くれば、コソらーつと寄つてきさみや
ん、じごんスウ(肛門) から手サシ
くうで腹わたスン抜くとじやつで」

また、ガラッパ除けには胡瓜もあ
る、あのトゲトゲが役にたつのだ。
河童が近付いて来て手を引こうとし
たとき、そろつと胡瓜を差し出すの
だ。すると「あ痛つ」と手を離す。
その隙に逃げればよい。「そいどん、

よそ様ん方の畑んとは黙つてオッ取つ
ちやならん」「水浴びつきや行くで、
胡瓜一本くだいな、ちゅうてもらえば
よかと」「すぎやすぎや」

よぼり

魚も夜になるとインだれ(疲れ)
て休むのであらう、岸辺の浅くて穏
やかな所にじつーとしている。ガス灯
(カーバイトに水を差し発生したア
セチレンガスを利用した照明具)を
点して、網ですくつたりイザリて突い
て獲る漁法。かつては夏場の風物詩
でもあった。

「お父つちゃん、おいも夜ぼりイチイ
て行たてよかな」「うん、わいももう
三年生じやつで、夜ぼつどましてよか
たい。そいどん滑つてサデこけんごと、
つのおんボ(足中) じよりよば踏んで
行かんばんたい。そいから水鏡の曇

らんごと、フツ(ヨモギ) ば揉みシイ
で磨やとけよ。今夜は三ツ石へんがよ
かつど」

川にもイダ淵・かばんずり・じゅ
うだん・げだんなど、割りと細かく
地名が付けられていた。そして場所
次第でカマツカやアユ、ウナギやイダ
などがテゴ一杯に獲れていた。戻つて
からそれらを背ごし(刺身) にした
り、焼魚に一杯ヒン飲むのは至福の時
であった。

おしよるさん舟

八月十五日の夜は、お精霊様たち
のこの世滞在期限がヒツ切れ、いよ
いよ地獄や極楽へとキヤー戻りにな
る日なのだ。それで、所次第では盆
踊りや太鼓踊りをしたり、花火大会
でお送りする。さらに初盆の家では、
精霊舟を造つて果物やお菓子などを

ドンつかさ(満載して) 流してさし
あげる、なまんだーぶ。

ただその舟も、一千由旬(約1万km)
もある「あの世」まで行き着くのか
どうか、至つて怪しい。というのも盆
明けの淵などには、どうもそれらし
い小舟が、悪ガキ共の遊び道具とし
て「活躍」しているからだ。せいぜい一
人か二人しか「乗船」できず、不安
定な小舟を小さな板切れでスーイス
イやつている。

「わが共ア、そん舟はどつからオッ
取つて来たことや」「どいオッ取つて来
たとじやろきや。こら、おつぎやの
兄ちゃんが、薩摩瀬のこうら(川原)
にウチ上がつつたとば、ひるうてき
たとばい。しーくわと一ぺんに」。

【まえだ・かずひろ／人吉市】

雷 (かみなり)

「夏一天文」

江口秋子

【季語の説明】

急激に発達した積乱雲によって、雷鳴が轟き、大量の雨が降る夏ならではの気象現象が「雷」である。夏の雷は特に強く、局地的に激しい雨や雹を伴うこともあり、停電や火災が起こす。遠くに聞こえる「遠雷」や、晴れ間に走る「日雷」、他にも「雷鳴」「迅雷」「はたた神」など呼び名は様々である。

● 遠雷や会つてはならぬ人とみて

【永田満徳評】

「雷」の一物仕立は常識の範囲内であることが多い。掲句は逢瀬におののきながら、語らいを楽しんでいる場面。あたかも雷がその危険な逢瀬の不安を掻き立てるように耳底で鳴っているところがいい。

花火 (はなび)

「夏一生活」

Papp Anikó

【季語の説明】

「花火」は浴衣姿で納涼を兼ねた日本の夏の風物詩である。種々の火薬を組み合わせ、夜空に高く打ち上げ、光の色や爆音を楽しむ。江戸期に隅田川の川開きの余興であった花火がその涼味も加わり、夏の季語となったとされる。庭先、海に遊びに行き、家族、友人と楽しむ庭花火、手持ち花火など色々種類がある。

● コロナとの共生語る花火かな

【永田満徳評】

「花火」は秋祭りの奉納の一つで、復興や悪疫退散の意味もある。掲句は今日避けて通れないコロナウイルス感染症を話題にしながら、悪疫退散の願いを込めて、「花火」に見入っているところがいい。

蓮の花 (はすのはな)

「夏一植物」

桑本栄太郎

【季語の説明】

「蓮」は東南アジア原産の草本性水生植物で、早朝に開花し、昼には閉じる花が美しい。観賞用にも食用にもなる。泥の中から出てきて、美しい花を咲かせるので、汚れない花とされ、特に仏教では象徴的な意味を持つ。果実が蜂の巣状をなすところから、「はちす」といわれ、「はす」はそれを略したもの。

● 天上天下唯我独尊蓮開花

【永田満徳評】

「蓮の花」は仏教との繋がりを感ぜさせる句が多い。掲句は自尊の心と、清浄な蓮の花とを取り合わせ、崇高な宗教的精神の世界を詠み、漢字表記はその精神世界を確固たるものとしているところがいい。

梅雨 (つゆ)

「夏一天文」

歌代美遥

【季語の説明】

「梅雨」とは春から夏に移り変わる際に雨や曇りの日が多くなる「雨季」の一種で、「梅雨入り」は古暦によれば6月の11、12日頃で、その後一か月間が「梅雨」となる。梅雨入り、梅雨明けは気象庁より発表される。災害の発生や農作物の生育などを左右し、農作業の目安ともなっている。

● 青梅雨やどう見ても錆色のして

【永田満徳評】

青梅雨は葉の色を濃くした木々に降る雨を指す言葉。青葉がより深い緑になる時期ならではの言葉である。掲句は「青梅雨」という言葉から、「錆色」に感じられたというところに感覚の鋭さがある。

蝸牛 (かたつむり)

「夏一動物」

石井真奈美

【季語の説明】

「蝸牛」は陸に住む貝の仲間で、渦巻き状の殻を持ち、柔らかな体で二本の角を出し、ゆっくりと這う姿が梅雨の頃によく見られる。日本だけでも約800種類ものの蝸牛が生息しているが、昔ほど見かけることは少なくなっている。野生の蝸牛は植物の茎や葉、落ち葉等を食べて生活している。

● ででむしや九十九島は雨の底

【永田満徳評】

ででむし（蝸牛）のユーモラスな動きから一物仕立が多いが、掲句は蝸牛と大景との取合せである。「九十九島」の大景もいいが、「雨の底」という措辞によって、深まりと広がりのある句になっている。

紫陽花 (あじさい 《あぢさゐ》)

「夏一植物」

中野千秋

【季語の説明】

「紫陽花」は落葉低木。開花期は6～7月で、額咲き、手まり咲きなどがあり、花色も豊富である。「梅雨に似合う花」と言えば紫陽花。小さな花が寄り集まるようにして円形を作る姿、雨に濡れた紫色の美しさは日本人の心をつかんできた。見え方で「四葩」、咲き方で「七変化」ともいわれている。

● 空の青うばひてよりの濃紫陽花

【永田満徳評】

雨の中で咲き誇る「紫陽花」は色鮮やかである。掲句は梅雨時の薄暗いなかで咲く濃紫陽花の青さを詠んだもの。あたかも晴天の空の「青」を「うば」ってきたかのようであるという見立ては発見がある。

前号【くまがわ学習塾③⑥の答え】

問1 次の地名の呼び名を書け 例：生名子（おいなご）

- ① 植柳（うやなぎ）八代市
- ② 高田辺（こうだべ）芦北町
- ③ 部（しとみ）球磨村
- ④ 簸瀬（えびらせ）芦北町と球磨村の両自治体にあり
- ⑤ 楮木（かじき）球磨村
- ⑥ 淋（そそぎ）球磨村
- ⑦ 海路（かいじ）芦北町
- ⑧ 枳俣（げずのまた）八代市坂本町
- ⑨ 鶴喰（つるばみ）八代市坂本町
- ⑩ 神瀬（こうのせ）球磨村

問2 以下の文章は正しいか、正しいときは○を、誤っているときは×をつけよ

（例：内閣は外出自粛を政令で決定できる。×）

- ① 蒲島熊本県知事は荒瀬ダムの撤去を決定した。×
- ② 検事総長は法務省に属し、警視総監は国家公安委員会に属する。○
- ③ 自転車には道路交通法は適用されない。×
- ④ コロナウイルスに罹患していると虚偽の事実を駅員に告げる行為は犯罪になる。○
- ⑤ 2020年度の「夏の甲子園大会」は中止になった。○
- ⑥ 細川ガラシャは明智光秀の娘である。○
- ⑦ 夏目漱石は俳人でもあった。○
- ⑧ 生活保護世帯はエアコンの使用を認められない。×
- ⑨ 靖国神社には安政の大獄の襲撃側の犠牲者も祀られている。○
- ⑩ エイズ感染症で死亡する人は存在しなくなった。×

問3 坂本町の製紙工場は合併等によって会社名を変えている。その会社名を述べよ（例：王子製紙株式会社坂本工場）

- ①（東肥製紙株式会社坂本工場）
- ②（九州製紙株式会社坂本工場）
- ③（樺太工業株式会社坂本工場）
- ④（十條製紙株式会社坂本工場）
- ⑤（西日本製紙株式会社坂本工場）

問4 八代市は干拓地が多い。干拓地の名前をあげよ（例：昭和新地）

- ①（金剛）
- ②（松崎）
- ③（高島）
- ④（郡築）
- ⑤（四百町新地）

問5 以下のナンプレ問題を解け（空白マスに適切な数字をいれよ）

9	4	1	2	5	7	8	6	3
5	7	3	6	4	8	9	1	2
2	8	6	1	3	9	5	4	7
1	3	4	9	2	6	7	5	8
6	5	7	3	8	4	1	2	9
8	9	2	5	7	1	6	3	4
4	6	9	8	1	3	2	7	5
7	1	5	4	9	2	3	8	6
3	2	8	7	6	5	4	9	1

問5 イギリスの国王（女王名）を10人あげよ（例：エリザベス女王）

- ① ジョージ6世（エリザベス2世の父）（最後のインド皇帝）
- ② エドワード8世（ジョージ6世の兄。離婚歴のある女性と結婚し退位）
- ③ ジョージ5世（エドワード8世とジョージ6世の父）
- ④ エドワード7世（ジョージ5世の父）（ビクトリア女王の息子）
- ⑤ ビクトリア女王（ジョージ3世の孫）（初代インド皇帝）
- ⑥ ウィリアム4世（ジョージ4世の弟）（ビクトリア女王の伯父）
- ⑦ ジョージ4世（ビクトリア女王の伯父）
- ⑧ ジョージ3世（ジョージ2世の子）
- ⑨ ジョージ2世（外国生まれの最後の国王）（ジョージ1世の子）
- ⑩ ジョージ1世（アン女王の双従弟）
- ⑪ アン女王（ジェーム2世の娘）（メアリー2世の妹）

編集後記

本誌7月号発行寸前の7月4日に起こった大水害は、巻頭特集にあるように大きな被害をもたらした。

★これまでテレビなどでリアルタイムに報じられてきた数々の災害、「阪神・淡路大震災」、「東日本大震災」、「熊本地震」、「西日本豪雨」など、正直にいうと、どこか遠い国の出来事だと見ているところがあった。その自分がまさか被災し、その渦中にいるとは。コロナ禍にあつて、毎朝起きるたびに夢の中にいるような日々。追い打ちをかけるような今回の水害。見ている夢の中で、さらにその劇中劇の中に暮らしているようだ。しかし現実には現実。コロナ禍のなか連日ボランティア活動されている人々に励まされながら、立ち上がるしかないであろう。★6頁の坂本桃子さんの報告にあるように本誌の編集主幹である上村雄一氏も命からがら救出され、避難所暮らしである。本号は、精神的にも時間的にも大きなブランクを経て、ようやく合併号という形でお届けした。次号も発行時期が未定であるが、何卒ご理解をお願いする次第である。(ま)

〒868-0015

熊本県人吉市下城本町1436-4の3号
人吉中央出版社「くまがわ春秋」編集部

info@hiyoshi.co.jp

電話・ファックス 0966・23・3759

今月の一言

『文読む月日』(レフ・トルストイ 編著
北御門二郎 訳) より

小さな苦しみはわれわれを逆上させるが、大きな苦しみはわれわれを自己回帰させる。罅^{ひび}の入った鐘は鈍い音を出す、二つに割ってしまえば再びいい音を出すものである。(ジャン・ポール・リヒテル)

表紙写真

「楼門や社殿群も浸水した青井阿蘇神社」

7月4日午前8時頃、この時から日常が一変した。私にとって、5回目の水害体験。まさか55年前と同じようなことになるとは。しかし人生七転び八起き。さあ頑張っていこう。



(撮影／宮原信晃)



TAKEDA Eye Clinic

たけだ眼科クリニック

院長 竹田 憲司

人吉市南泉田町39 ☎23-3096

めがね・コンタクトレンズの

アイウェア榎

(たけだ眼科ビル内) ☎0966-23-3097

デイサービスセンター

ケアプラン作成所いずみ
(居宅介護支援事業所)

いずみ

協力医療機関 たけだ眼科クリニック

人吉市南泉田町70番地の3 ☎0966-28-3307

すべての人を自分の親だと思って…



- 特 別 養 護 老 人 ホ ー ム
- 短 期 入 所 生 活 介 護
- 通 所 介 護 事 業 所
- 居 宅 介 護 支 援 事 業 所

社会福祉法人 天雲会

龍生園

〒868-0086 人吉市下原田町瓜生田1057-9

施設部門 ☎0966-22-6621 FAX 0966-22-6622

在宅部門 ☎0966-22-2141 FAX 0966-22-2183

URL: www.ryuseien.jp

E-mail: tenunkai-daihyou@ryuseien.jp